第 3 章　ペラ州における後期中等学校生徒の進路分化
―質問紙調査の量的分析―

第 3 章　ペラ州における後期中等学校生徒の進路分化
―質問紙調査の量的分析―

第 2 章では、マレーシアにおける各種政策の変遷が、女性の教育拡大・拡充にどのように影響してきたかについて検討した。それは言わばマクロ次元からの分析であったが、女子・女性が教育に対して様々なニーズを有しているとすれば、ミクロ次元からそれら多様なニーズを把握する必要がある。本章では、ミクロ次元において、マレーシアの後期中等学校の生徒が、何を動機とし、いかにして進路選択しているかについて実地調査から明らかにする。

本研究では、女性の進路形成に少なからず影響を与える性役割観を手がかりとして、途上国の女子教育の多様な現状を説明する。欧米のフェミニズム、女性学、ジェンダー論や国際女子教育開発の文脈で、男女間教育格差を導く要因として固定的・伝統的性役割観が問題視されることが多い。しかしながら、第 2 章で論述した通り、性役割観が残る現代マレーシア（とりわけマレー社会）において女子・女性の教育が拡大していることから、性役割観を進学阻害要因とみなすことには疑問が残される。

このような疑問を解決するために、本章では、マレーシアにおける後期中等学校生徒の進路分化と、進路分化に影響を及ぼす要因として性役割観に着目し、質問紙調査を実施する。質問紙調査の方法は、以下の通りである。まず、調査の前段階として、3 州の後期中等学校において、進路指導担当者や進路指導カウンセラーに実施した面接調査（2001 年 9 月）の結果から、調査対象となる州と学校種別を選定し、仮説を構築する（第 1 節）。次に、本調査の対象となるペラ州と、ペラ州における 3 種類の学校の概要示し、州と学校の「サンプルの代表性」を検討する。続いて、後期中等学校生徒の進路選択の一端を示す質問紙調査（第 1 次調査、2002 年 8 月中旬～下旬）の概要と（第 2 節）、その結果の全体像を示す（第 3 節～第 4 節）。なお、質問紙調査の分析に際して、エスニック集団別の進路分化だけでなく、女性内部の進路分化のありようを明らかにする。また、第 1 章で批判的に検討してきたマレーシアの先行研究の結果と対比し、本調査の結果を相対化することに努める（第 5 節）。

第１節　調査対象の選定と仮説の構築―進路指導担当者の予備調査―

１．　州の選定

筆者は、マレーシアの 13 州の中から、ペラ州（Negri Perak：Perak State)、ペナン州(Negri Pinang ： Pinang State)、クランタン州（Negri Kelantan：Kelantan State）という 3 州を訪問し、本調査に先立つ予備調査に従事した[1]。マレーシアを対象とする本研究において、各州間の比較（州間比較）と州内部の比較（州内比較）という 2 つの比較が可能であるが、予備調査を通じて州内比較を選定した。その理由は次の通りである。

マレーシアにおいて、クランタン州やトレンガヌ州などマレー人が圧倒的に多い州と、ペナン州など華人がマレー人を上回る州などがあるが、人口構成比が国全体の平均（マレー人 6 割：華人 3 割）に近い州はあまり多くない。たとえ州の人口構成比が国全体のそれに近いとしても、実際には州内でエスニック集団別に居住地が分かれている場合も多い。それゆえ、調査対象としてマレーシア全体のエスニック集団の人口比に近い州を選ぶことにそれほど合理性はないと考える。同様に、マレーシアの初等学校は、マレー語、華語、タミル語など、教授言語別に異なるが、その学校数や在学者数が、全州の平均値に近い州を選ぶのも困難である[2]。したがって、本研究では、州間比較ではなく州内比較を選択し、同一州内における異なった学校種別を比較する。本研究では、近接する生活空間にマレー人と非マレー人が相当数居住し、同一・類似条件下における進路形成を対比しやすいと予測されるペラ州を調査対象とする。対象とする学校の中には、エスニック集団の構成比がマレーシア全体の構成比に近い学校（種別）を含めることとする。

写真 3-1　教室に飾られるマレーシア国旗（中央）と各州の旗

写真 3-2　教室に飾られるスルタンの写真

ペラ州の人口は約 200 万人（2000 年）であり、エスニック集団別の人口比（1995 年）は、マレー人 962,200 人（全体の 45%）、華人 732,500 人（41%）、インド人 281,700 人（14%）である[3]。ペラ州の面積は 21,006 km^2 であり、パハン州に次いで半島マレーシアでは 2 番目に大きい。ペラ州は、州境をスランゴール州、ペナン州、クダ州、パハン州、クランタン州やタイの国境線と接しており、首都クアラ・ルンプールにも近い。また、後述する通り、行政地区（daerah）は 9 つに分かれている。ペラ州最大の都市イポー(Ipoh)は、首都クアラ・ルンプールに次ぐ人口規模を誇る都市であるが、その他の都市に、タイピン(Taiping)、テロッ・インタン（Teluk Intan)、スンガイ・シプッ（Sungai Siput)、クアラ・カンサー（Kuala Kangsar)、ルムッ（Lumut)、バトゥ・ガジャ（Batu Gajah）などがある。

ペラ州は、錫鉱山開発の賃金労働者である華人の移住によって発展してきた州である。そのため、現在でも砂錫鉱床地帯には、華人の各方言集団の割拠する錫鉱山町が残っている。しかしながら、錫鉱山の開発によって発展してきた他の州が、マレー人の人口よりも華人の人口が多いのに対して、ペラ州は、マレー人と華人の人口比が拮抗しているという点に特徴が認められる。ペラ州がそのような人口構成であることの歴史的背景の一つとして、1979 年にダッワ（dakwa）と呼ばれるイスラーム復興運動が高まりを見せ、イスラーム法を強化する動きがあったことが挙げられる。歴史的には、錫鉱山やゴム・プランテーションに関連する産業によって発展してきたが、最近は製造業が主な産業である。

写真 3-3　ペラ州における錫鉱山跡地

2. 学校種別の選定

マレーシアの教育行政制度は強固なトップダウン式であるため、各州や各学校における教育実践には、国家の教育政策や教育計画が色濃く反映している[Marzuki 1995, pp.74-76；竹熊 1998,pp.23-25]。

また、マレーシア理科大学（USM）のモリー・リー助教授（2002 年 8 月当時、現UNESCO Bangkok）によると、マレーシアの中等学校の種別は、（ⅰ）設置形態（国公立・私立、国公立)、（ⅱ）男女別の構成（男子校・女子校・共学校)、（ⅲ）エスニック集団別の構成比（単一民族校・多民族校)、（ⅳ）宗教学校・世俗学校などから多種多様に分類でき、どの学校種別を調査対象として選択するかに応じて結果が異なると予測できる[4]。それゆえ、予備調査では、様々な学校種別の中から、国公立の国民学校(Sekolah Kebangsaan/National School)2 校と、私立学校（Sekolah Swasta/Private School）2 校の計 4 校を対象とした。予備調査を踏まえて、本調査では、ペラ州内でより高い学業成績を収める女子生徒が進学する州立宗教学校を対象に含める一方、私立学校を対象から外すこととした。

予備調査に基づくサンプル選定の結果、下記の 3 校を調査対象校とする[5]（**表 3-1**)。

（ⅰ）マリム・ナワール中等（普通）学校

（ⅱ）ペイ・ユエン中等（普通）学校

（ⅲ）タッヤ州立宗教学校

写真 3-4　マリム･ナワール全校集会 1

写真 3-5　マリム･ナワール全校集会 2

表 3-1　対象校の概要

学校名	マリム・ナワール 中等学校	ペイ・ユエン 中等学校	タッヤ 中等学校
学校種別	普通学校	普通学校	宗教学校
設置形態	政府立	政府立・私立併設	州立
男女共学・別学	共学	共学	別学（女子校）
学校形態	通学制	通学制 通学バスあり	全寮制
所在地	マリム･ナワール	カンパー	イポー
都市からの距離	小都市郊外	小都市	大都市中心部
地区と管轄	キンタ地区教育局（Pejabat Pendidikan Daerah:PPD）註 1		
教授言語	マレーシア語	マレーシア語 華語(北京語)	マレーシア語
フォーム・シックスの有無	なし	なし	あり
生徒数	905 人　註 2 男子 442 人 女子 463 人	1,799 人 男子 859 人 女子 940 人	756 人 男子　0 人 女子 756 人
クラス数	35 クラス	37 クラス	—
エスニック集団構成	多民族	大半が華人	マレー人
教師数	62 人 男性 32 人 マレー人 23 人 華人 6 人 インド人 3 人、 女性 30 人 マレー人 25 人 華人 4 人 インド人 1 人	89 人	45 人 男性 10 人 女性 35 人 マレー人 42 人 華人男性 2 人 インド人女性 1 人

註 1:ペラ州は 9 つの行政地区からなっており､それぞれの地区に地区教育事務所(Pejabat Pendidikan Daerah：PPD）がある。本調査の対象校は、ペラ州の中でも産業経済の中心都市であるイポーを含むキンタ地区にある。

註 2：マリム・ナワール中等学校の生徒数の内訳は、フォーム・トゥー（男子 102 人、女子 113 人、計 215 人)、フォーム・スリー（男子 135 人、女子 124 人、計 259 人)、フォーム・フォー（男子 100 人、女子 102 人、計 202 人)、フォーム・ファイブ（男子 105 人、女子 124 人、229 人）である。

出所：調査時に収集した資料および聞き取り調査から筆者作成。

（ⅰ）中等（普通）学校は、マレーシアで最も多い形態の中等学校であり、都市部・農村部を問わず設立されている。調査対象となるマリム・ナワール中等学校(Sekolah Menengah Malim Nawar：Malim Mawar Secondary School、所在地： Negri Perak、普通学校・共学校・多民族校）は、調査当時フォーム・トゥーからフォーム・ファイブまで 35 クラスあり、合計 905 人（男子 442 人、女子 463 人）の生徒が在学している（2000 年)。学校は小都市の郊外に位置するが、生徒のほとんどは農村地区から来ているため、親の職業は農業もしくは小規模の自営業が多い。教師は、男性 32 人（マレー人 23 人、華人 6 人、インド人 3 人)、女性 30 人（マレー人 25 人、華人 4 人、インド人 1 人）という構成である。成績別のクラス編成（ストリーミングクラス）が採用されている[6]。二部制がとられ、午前の部は、1 時限が 7 時 30 分に始まり、14 時 5 分まで授業が行われ、午前の部が終了する頃に午後の部が始まる。基本的に 1 コマ 40 分（昼食後 35 分）で授業を行うが、同じ科目を 2 コマ通して行う授業もある。

（ⅱ）も同じく中等（普通）学校であるが、華人が生徒の大半を占めており、非マレー人の初等学校修了後の進学先として最も一般的な学校である。調査対象とするペイ・ユエン中等学校（Sekolah Menengah Pei Yuan/ Pei Yuan Secondary School、所在地：Kampar, Negri Perak、普通学校・共学校）は、フォーム・ファイブまである。広東語を話す生徒が多いが、学校では、できる限り教授言語である北京語を話すように指導されている。ペイ・ユエンは、マリム・ナワールよりは規模の大きい小都市に位置しており、その周辺や少し離れた所から通う生徒が多い。午前の部・午後の部を合わせて 1,799 人の生徒（男子 859 人、女子 940 人）が在学している。クラスは 37 クラスで、成績別のクラス編成を採用している[7]。教師は 89 人（男性 33 人、女性 56 人）おり、教師対生徒の比は 1：20 である。独立華文学校と敷地を共有し、親が積極的に活動しているという点が特徴的である。

（ⅲ）の州立宗教学校は、選抜によって入学が許可された生徒のみが通うことができる「進学校」であり、その点は上記 2 校とは異なる。本調査の対象となるタッヤ州立宗教学校（Sekolah Menengah Agama Negri Taayah/Taayah State Secondary Religious School、所在地：Ipoh, Negri Perak、宗教学校・女子校）は、ペラ州の大都市イポーにある女子校である。全寮制の宗教学校であり、主としてペラ州出身のマレー人女子のみが在校している。タッヤには、前期・後期中等学校とフォーム・シックスが設置されている。調査当時（2000 年）の生徒数 756 人は全てマレー人の女子生徒であり、その内フォーム・ファイブの生徒は 112 人である。一方、教師 45 人（男性 10 人、女性 35 人）は、華人 2 人、インド

人 1 人以外は、全てマレー人（42 人）である。タッヤでは、中等学校に入学する際に選抜試験があるため、いわゆるエリート校として広く一般に知られている。生徒はペラ州全域から選抜されており、後期中等学校修了後には、公立大学のマトリキュレーションに進学する生徒が多い。クランタン州における予備調査の際に、マレーシア理科大学の教員（マレー人、50 代女性）から、「最近は、男女別学の宗教学校が、全国統一試験で優秀な成績を収めている場合が多い」と教えられたことを契機として、第 3 の調査対象校として宗教学校を選択した。調査対象に私立学校を含めることも想定できるが、進路形成の多様性を調べるためには、高い学業成績を収める女子生徒を対象とすることにも意義があると考える。

3. 仮説の構築

予備調査では、4 つの中等学校を訪問し、各学校の生徒の進路の全体像を把握している進路指導担当者およびカウンセラーを対象とするインタビューを実施した（**参照　予備調査の結果**）。予備調査の結果は、進路指導担当者の認識や印象から得られた知見であることから、第 1 次調査以降の対象校を選定し仮説を構築するために活用した。以下の 4 点が、予備調査に基づく本調査で明らかにする研究設問である。第 1 に、後期中等学校生徒の進路選択において、エスニック集団別の差異が見られるのではないか、第 2 に、後期中等学校生徒の進路選択において、男女別に差異が見られるのではないか、という点である。第 1 と第 2 の点に関して、エスニック集団別と男女別の進路の差異が見られることは先行研究で既に明らかにされている。しかし、必ずしも実証的研究が蓄積されていないため、本調査で確認することとする。

第 3 に、エスニック集団別や男女別で、進路を選択する理由や背景が異なるのではないか、という点である。日本や欧米の先行研究で再三指摘されてきた通り、メリトクラティックな要因（学業成績など）が、マレーシアの後期中等学校の生徒の進路選択に強く影響を及ぼすと考えられる。だが、メリトクラティックな要因だけでなく、エスニック集団別の性役割観などのノンメリトクラティックな要因も、進路に差異を生じさせる要因となっていると予測する。

第 4 に、マレーシアの男性や女性に特有の「成功」物語や、教育と職業に対する考え方や価値観があるのではないか、という点である。予備調査において、多くの進路指導担当者から、男子が後期中等教育を修了した後に就職するのを好む一方、女子はマトリキュレ

写真 3-6　ペイ･ユエンの通学バス

写真 3-7　マリム･ナワールの運動場

写真 3-8　マリム・ナワールの職員室

ーションやフォーム・シックスを通じて高等教育に進学することを好むという意見が挙がった。ただし、高等教育を修了した後の個別具体的な進路については進路指導担当者の知るところではなかった。そのため、進路形成に対する考え方や価値観の一端を明らかにし、その後の長期的な進路展望についても明らかにする。

以上の 4 点について、それぞれエスニック集団間、男女間の差異を明らかにし、それらの差異を生じさせる要因・背景について整理すること、また、女性自身の進路形成意識や態度について、マレーシアの文脈に沿って解釈することが、本調査の目的である。

4. ペラ州の教育

(1) ペラ州教育史

本項では、19 世紀後半から現代までのペラ州における教育の展開の中で、女子を受け入れる教育機関の変遷等について検討する[8]。

1826 年に、ペラ州で最初のマレー語学校が、マタン・グルグー（Matang Gelugur）に設立された。それ以降、「パンコール協定（Perjanjian Pangkor)」[9]（1874 年）が結ばれるまで、ペラ州にはマレー語学校は 3 校あるのみであった。ところが、英領マラヤ政府が、海峡州（Negeri negeri Selat）とペラ州の「高い階層の人々（pembesar）とマレー社会のために」マレー語学校を相次いで設立するようになり、1890 年までには、18 校のマレー語学校が設立された。このように、19 世紀の後半からマレー語学校数は急速に増加し、1900 年には 64 校にも上った。

一方、英国政府によって運営された政府立英語学校（Sekolah Menengah Aliran Inggeris/ Government English School）は、英国政府の公務員の子どもたちを教育する役割を担っていたが、マレー語学校が既に 64 校設立されていた 1900 年には、英語学校は 7 校存在していた[10]。最も古い英語学校として、キング・エドワード中等学校（SM King Edward Taiping）(1883 年設立、以下同)があり、クリフォード中等学校（SM Clifford, K.Kangsar）(1897 年)、アンダーソン中等学校（SM Anderson, Ipoh）(1909 年)や聖ジョージ中等学校（SM St.George, Taipin）(1914 年)、修道院中等学校（SM Convent , Telok Anson）(1919 年)などが、20 世紀初頭までに相次いで設立された。

ペラ州において、華語による中等教育も、初等教育とほぼ同時期に始まった。たとえば、

ユッチョイ国民型中等華語学校（SMJK(C)Yuk Choy, Ipoh）(1908 年)、ツンワッ国民型華語学校(Tsung Wah, K.Kangsar)(1911 年)、ユッ・クワン国民型中等華語学校(SMJK(C)Yuk Kwan, Batu Gajah）(1911 年)、シン・チュン国民型中等華語学校（SMJK(C)Shing Chung, Sungai Siput）(1912 年)、ペイ・ユエン国民型中等華語学校（SMJK(C) Pei Yuan, Kampar）(1912 年)などが初期に設立されたが、これらの学校が、ペラ州における初期の華語による中等教育を担ってきたのである。

マレー語学校、英語学校、華語学校以外に、全寮制学校がある。ペラ州における全寮制学校の設立時期は、マラヤ連邦独立を境に 2 つの時期に分けられる。まず、前期は、マレー人のための全寮制学校として最も歴史があるクアラ・カンサー教員養成カレッジ(Maktab Melayu Kuala Kangsar)(1905 年)、ダトッ・アブドゥール・ラザク学校(Sekolah Datuk Abdul Razak, Tg.Malim:SDAR)(1956 年)、トゥンク・アブドゥール・ラーマン学校(Sekolah Tuanku Abdul Rahman, Ipoh）(1957 年)などが設立された時期である。そして、後期は、トゥンク・アブドゥール・ラーマン学校（1980 年までにスレンバンに移転し、新しい同名の学校がイポーで開校)、スラタス・タイピン（SERATAS Taiping）(1982 年)や、テロッ・インタン科学中等学校（SM Sains Teluk Intan）(1984 年)が設立された時期である。これら 2 期にわたって設立された全寮制学校は、農村地区に居住するマレー人の子どもたちに対して、中等教育の機会を提供した。

同じく全寮制を採用している学校種別として、州立の宗教学校も挙げられる。ペラ州においても他の州と同様に、宗教学校以前には、イスラーム教を学ぶ場であるコーラン学校、ポンドックやマドラサにおいて宗教教育が行われていた。ペラ州において、1913 年には数十のマドラサが建設されており、その後もイドリシャマドラサ（Madrasah Idrisiah Bukit Chandan, K. Kangsar)(1922 年)、マリアアルアラビアマドラサ(Madrasah Al-Arabiah Mariah, Bukit Chandan, K.Kangsar）(1922 年)などが設立された。1920 年代から 30 年代にかけては、イルシャディア中等学校（SM Irsyadiah , Bagan Datok）(1923 年)エッヤアルシャリフマアハッド（Maahad Ehya-Al Shariff, Gunong Semanggol）(1934 年)、アルアジア国民宗教中等学校（SM Agama Rakyat Al-Aziziah, Parit）(1935 年)などが、中等教育段階において宗教教育を提供する機関として設立された。

このような多様な種別の学校を設立する任務を果たしたのは、1890 年に設置されたペラ州教育局(Jabatan Pelajaran)であった。19 世紀後半には、英国の植民地政策により、ペラ州にインド人と華人が大量に移住するようになったため、既存の組織では対応できなくな

写真 3-9　ペラ州の新学校開学（1938 年）の説明
（ペラ教育ギャラリー所蔵資料、以下同）

写真 3-10　学校の制服（1939-1954 年）（一番右のみ女子）

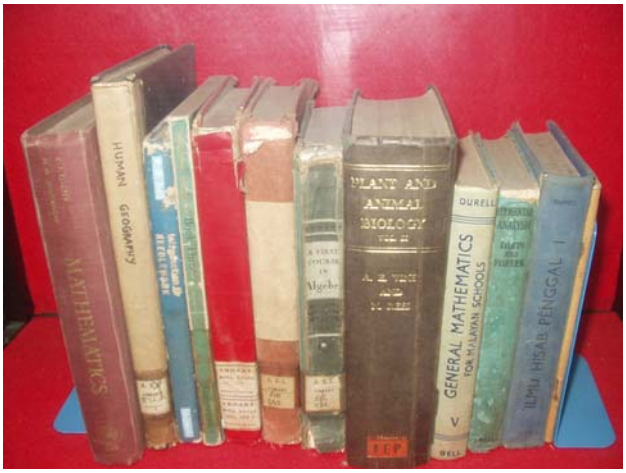


写真 3-11　教科書

り、教育局の組織は複雑になっていた[Persatuan Sejarah Malaysia 1985、pp.1-2]。

さて、ペラ州における女子教育は、英国植民地政府の肝いりで実施され始めた。まず、1890 年に教育法典が発布され、英国からの経済援助によりペラ州の教育カリキュラムが整備された。カリキュラム整備によって、「男子のための仕事（Pekerjaan Tangga untuk murid murid lelaki sahaja)」と「女子のための仕事（Pekerjaan Tangga untuk murid murid perempuan sahaja)」という男女別々の科目が設けられるようになった[Persatuan Sejarah Malaysia 1985, p.6]。1916 年には、マレー母語教育の副担当と視学がペラ州に派遣されているが、最初の視学は、後に女子の教員養成にも多大な影響を与えた R.O.ウィンステッドであった。20 世紀初頭に、ペラ州でマレー語女子学校が設立され、女性指導教官（Penyelia Perempuan/LadySupervisor）が雇用された。しかしながら、世界恐慌の影響を受けて、マレー語学校の女性指導教官の職は 1931 年までに廃止された[Persatuan Sejarah Malaysia 1985, p.3]。

第 2 次世界大戦後に、マレー語学校の学校数自体はほとんど増加しなかったが、生徒数は男女ともに徐々に増加した（**表 3-2**）。その後、第 2 章で概観した国家の教育政策文書による施策の影響を、ペラ州においても受けることとなり、生徒数は増減を繰り返した。まず、ラザク・レポート（1956 年）によって、1960 年からマレー語による中等教育が開始されるようになった。同時期に、ペラ州においては、テロッ・アンソン中等学校（SM Telok Anson、1967 年から SM Telok Intan）（1958 年）、イポー中等学校（SM Ipoh、後に SM Raja Chulan, Ipoh に改名）（1968 年）、スリ・ペラ中等学校（SM Sri Perak, Parit Buntar）（1961 年）、ドクターバハルディン中等学校（SM Dr. Barharudding, Taiping）（1967 年）などが相次いで建設された。マレー語中等学校の建設ラッシュの時期を過ぎた 1965 年から 1978 年までの約 15 年間にも、ペラ州の中等学校における生徒数は、若干の増減を繰り返しながらも概ね増加している（**表 3-3**）。また、エスニック集団別の中等学校生徒数（1979 年）によると、マレー人とインド人の生徒数は男女それぞれ同数であるが、華人の生徒数は男子の方が若干多い（**表 3-4**）。

ペラ州で中等学校の在学者数が増加してきたが、マレー語中等学校を修了した生徒の進路は 1950 年代までは限定されていた。中等学校修了後には、クアラ・カンサーのマレー教員養成カレッジ（Maktab Melayu/Malay College, Kuala Kangsar）か、クアラ・ルンプールのマレー女子教員養成カレッジ（Maktab Perempuan Melayu/ Malay Girl’s College, Kuala Lumpur）にのみ進学することができた[Persatuan Sejarah Malaysia 1985、p.22]。

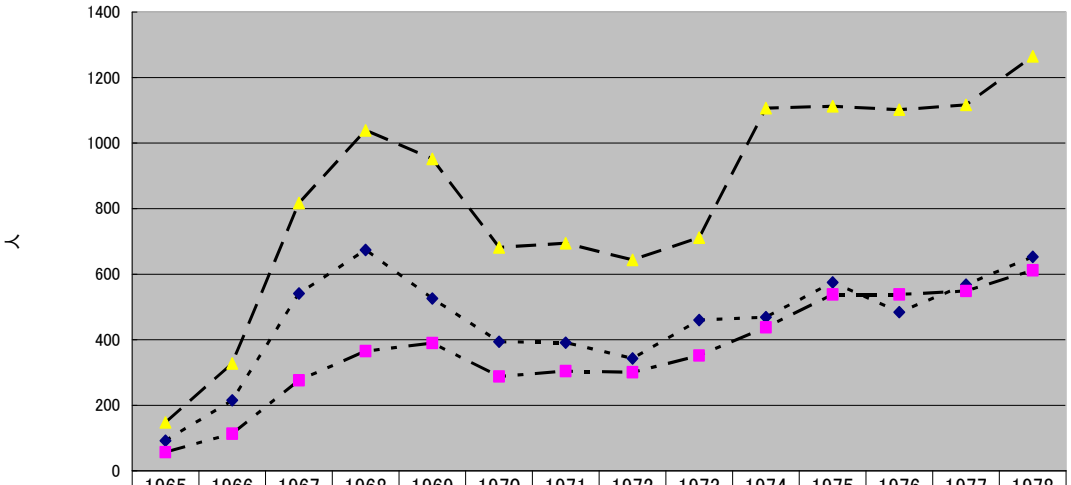
表 3-2　マレー語学校数と在学者数（ペラ州、1941-1948 年）（単位　校、人）

年	男子校	女子校	男　子	女　子
1941	231	57	25,974	4,821
1946	224	48	24,558	4,030
1947	233	48	28,930	4,987
1948	249	54	35,275	6,259

出所：Persatuan Sejarah Malaysia 1985, p.9.

表3-3　中等学校における在学者数の推移（ペラ州、1965-1978年）

（単位　人）



	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
男子	92	215	541	674	526	394	391	343	460	469	575	484	568	653
女子	57	113	276	365	390	288	304	301	352	438	538	538	549	612
計	148	328	817	1039	952	682	695	644	712	1107	1113	1102	1117	1265

出所：Persatuan Sejarah Malaysia 1985, p.118.

表 3-4　中等学校におけるエスニック集団別・男女別在学者数（ペラ州、1979 年）

（単位　人）

	男　子	女　子	合　計
マレー人	635	637	1,272
華人	102	82	184
インド人	9	9	18
合　計	746	728	1,474

出所：Persatuan Sejarah Malaysia 1985, p. 118.

また、ペラ州において、世俗教育だけでなく宗教教育も行われてきたことは、先に述べた通りである。マラヤ連邦の独立以来、ペラ州の宗教教育に最も大きな変化をもたらしたのは、イポーのシャー・イズディン中等学校（Sekolah Menengah Izzudin Shah）（1959 年）

と、タッヤ女王中等学校（Sekolah Menengah Raja Perempuan Ta’ayah）（1960 年）の設立であった。これらの学校は、州の宗教教育協会（Institusi Pelajaran Agama）の管轄にありながら、政府学校とほぼ同じ形態をとっていたため、宗教教育に関わる科目だけでなく、世俗教育（通常の学習）の科目にも力が入れられていた[Persatuan Sejarah Malaysia 1985, pp.168-69]。これら代表的な 2 つの州立宗教中等学校の他にも、1980 年代以降に、スルタン・シャー・アジアン宗教国民中等学校（SM Kebangsaan Agama Sultan Asiza Shah, Bota）（1984 年）、スリム・リバー宗教中等学校（SM Agama Slim River）（1992 年）、スマンゴル・クリアン宗教国民中等学校（SM Kebangsaan Agama Kerian Semanggol）（1999 年）が設立された。

第 2 次世界大戦以前から、ペラ州では技術教育が実施されており、1960 年代後半には技術・職業教育を専門とする中等学校が新設された。その内、イポー職業中等学校（SM Vokasional Ipoh）（1968 年）、イポー技術中等学校（SM Teknik Ipoh）（1972 年）、タイピン・カムンティング職業中等学校（SM Vokasional Kamunting, Taiping. 後に SM Teknik Taiping）（1977 年）、マンジュン技術中等学校（SM Teknik Manjung, Perak）（1992 年）、スリム・リバー技術中等学校（SM Teknik Slim River Perak）（1986 年）は、初期に設立された技術中等学校および職業中等学校である。

ペラ州において、公立高等教育機関（IPTA）が設立されるようになったのは、1970 年頃であった。まず、ウンク・オマール・ポリテクニク（Politeknik Ungku Omar, Ipoh）（1969 年）を皮切りとして、マレーシア理科大学分校（Cawangan Universiti Sains Malaysia, Tronoh）（1986 年）が設立された。さらに、1990 年代後半の高等教育改革の時期には、ペトロナス工科大学（Universiti Teknologi Pertonas）（1997 年）が設立されるとともに、スルタン・イドリス教員養成大学（Universiti Pengurunan Sultan Idris:UPSI, Tanjung Malim）（1997 年）が新たに大学としてスタートしている[11]。

(2)ペラ州における現代の教育

本項では、現代におけるペラ州の教育について概観する。マレーシアの初等教育段階は言語別に分けられているため、州内の初等学校の内訳から、就学者のエスニック集団比を凡そ推測することができる。**表 3-5** から、ペラ州における初等学校は 823 校あり、在学者数は 272,826 名である（2001 年）。その内、在学者の内訳は、マレー語を主たる教授言語と

表 3-5　初等学校数・在学者数・教師数（マレーシアとペラ州、2001 年）

（単位　人、%）

	学　校		在 学 者		教　師	
	全 州	ペラ州	全 州	ペラ州	全 州	ペラ州
国 民 学 校	5,466(74.8)	495(60.1)	2,209,736(75.8)	185,748(68.1)	123,357(78.1)	10,547(69.6)
国民型華語	1,285(17.6)	189(23.0)	616,402(21.1)	70,480(25.8)	28,102(17.8)	3,362(22.2)
国民型ﾀﾐﾙ語	526(7.2)	137(16.6)	88,810(3.0)	16,490(6.0)	5,998(3.8)	1,212(8.0)
特 殊 学 校	28(0.4)	2(2.4)	1,893(0.1)	102(0.03)	526(0.3)	30(0.2)
合　計	7,305(100)	823(100)	2,916,841(100)	272,826(100)	157,985(100)	15,151(100)

出所：Ministry of Education 2001.

表 3-6　公立中等学校数・在学者数・教師数・クラス数（ペラ州、2003 年）　（単位　人）

	学校	在 学 者			教　師			クラス
		男　子	女　子	合　計	男　子	女　子	合　計	
普 通 学 校	190	102,200	106,978	209,178	4,620	7,379	11,999	6,356
全寮制学校	4	2,036	546	2,582	125	129	254	94
宗 教 学 校	3	974	970	1,944	76	82	158	70
技 術 学 校	10	2,987	1,495	4,482	404	325	729	152
合　計	207	108,197	109,989	218,186	5,225	7,915	13,140	6,672

出所：ペラ州教育局ウェブサイト.

表 3-7　私立中等学校数・在学者数・教師数（マレーシアとペラ州、2001 年）　（単位　人）

	学　校		在 学 者		教　師	
	全 州	ペラ州	全 州	ペラ州	全 州	ペラ州
中等学校（アカデミック）	98	13	15,354	3,264	1,157	142
宗教学校	44	4	41,771	310	2,114	50
華文独立中学	60	1	43,904	506	2,760	38
合　計	202	18	101,029	4,080	6,031	230

註：私立学校は、Maklumat Intsitusi Pendidikan Swasta(Sehingga 31 Mei 2001)から抜粋。
出所：Ministry of Education 2001.

する国民学校の割合が 68.1%、国民型華語学校が 25.8%、国民型タミル語学校は 6.0%である。つまり、ペラ州の学校における教授言語別構成比は、全州の構成比と比べて、国民型華語学校と国民型タミル語学校の比率が高い。特に、国民型タミル語学校の学校数と就学者数は、全州の 2 倍程度に上っている。ただし、人口比に照らし合わせると、華人やインド人で国民学校に在学している割合も一定程度いると考えられる。

次に、ペラ州の公立中等学校は、特殊学校（sekolah khas）を含めて 207 校あり、生徒数は 218,186 人である（2003 年）（表 3-6）。その内訳は、普通学校 190 校、全寮制学校 4 校、宗教学校 3 校、技術学校 10 校である。また、中等教育段階の普通学校と宗教学校にお

いては男女の在学者数がほぼ均衡しているが、全寮制学校では男子が女子の 4 倍程度、技術学校では男子が女子の 2 倍程度と、全寮制学校と技術学校で男子が女子を大きく上回っている。また、教師数については、技術学校で男性教師が多い他は、男性教師よりも女性教師の数が多い。なお、ペラ州の私立中等学校は 18 校であり、公立中等学校数（207 校）に比べると少なく、全在学者数も 4,080 人である（2001 年）（**表 3-7**）。

1990 年の教育年報から、ペラ州の在学者の特徴を全国平均と対比すると、ペラ州の中等学校の在学者数に占める男女比はほぼ全国平均に近いことが分かる[Ministry of Education 1990、p.32、p.39]。学校種別では、普通学校におけるマレーシア全州の在学者数の男女比と、ペラ州の在学者の男女比はほとんど同じであるが[12]、宗教学校の男女比については、マレーシア全州よりもペラ州の方が男子の割合が多い[13]。また、職業学校と技術学校については、程度の差はあるが男子が多いという特徴は、全州平均でもペラ州でも見られる特徴である。ただし、全寮制学校については、全州とペラ州とでは男女比が異なっており、ペラ州の全寮制学校で男子の割合が高い。なお、このような中等学校の在学者に関するペラ州の特徴は、最新の統計資料においても変化していない。

ところで、ペラ州キンタ地区教育局は、本調査の対象となる 3 つの学校を管轄しており、各教育段階を終了した後に実施される全国統一試験の結果を毎年ウェブサイトに公表している。本研究の対象となるフォーム・ファイブ生徒は、後期中等学校終了後に受験するマレーシア教育証書試験（SPM）の結果に応じて進学先が選別されることとなるが、その合格率は、フォーム・シックス生徒が受験するマレーシア上級教育証書試験（STPM）に比べて低い（**表 3-8**、**表 3-9**）。

以上のことから、ペラ州はマレーシア全州の平均に比べて、非マレー人が多く在学する国民型初等学校の割合が高いが、マレー人が多い国民学校も一定程度存在する。また、全州とペラ州の中等学校における在学者の特徴は普通学校では共通している一方、全寮制学校では異なる。加えて、ペラ州における中等学校の男女比は、全州平均と類似した傾向を示す。つまり、マレーシア全州とペラ州の学校数・在学者数（エスニック集団別・性別）に関する特徴は、各エスニック集団別や性別の比較・対比を妨げるほどであるとは言えず、ペラ州における調査がマレーシアの一例として妥当性を持つと考えられる。

表 3-8　ペラ州キンタ地区における SPM 合格者数と比率（1995-1999 年）

（単位　人）

受験年	1995	1996	1997	1998	1999
受験者数	11,328	10,189	10,463	10,949	11,197
合格者数	7,420	7,394	7,323	7,423	7,501
合格者の割合(%)	65.50	72.57	69.99	67.80	66.99

出所：キンタ地区教育局ウェブサイト.

表 3-9　ペラ州キンタ地区における STPM 合格者数と比率（1995-1999 年）

（単位　人）

受験年	1995	1996	1997	1998	1999
受験者数	1,297	1,266	1,286	1,301	1,201
合格者数	1,262	1,252	1,273	1,295	1,079
合格者割合(%)	97.30	98.89	99.00	99.54	89.84

出所：キンタ地区教育局ウェブサイト.

第 2 節　第 1 次調査の概要

1.　調査の方法

第 1 次調査「後期中等学校生徒の進路選択とその影響要因」では、制限回答法（closed-ended question）による質問紙調査（自記式、集合調査）を実施した（2002 年 7 月 23 日～8 月 28 日）（**参照　第 1 次調査の概要**）。第 1 次調査の目的は、マレーシア・ペラ州において、後期中等学校の生徒（フォーム・ファイブ）が展望する進路と進路選択の動機や理由、それらに見られる男女別・エスニック集団別の差異について明らかにすることである[14]。

調査対象は、ペラ州の公立中等学校の内、（ｉ）共学の多民族校で、農村部の生徒が通うマリム･ナワール中等学校[15]、（ⅱ）小都市に位置する共学で華人が多いペイ・ユエン中等学校[16]、（ⅲ）都市にあるマレー人のみの全寮制女子校であるタッヤ中等学校[17]という 3 校である。サンプル数の内訳は、（ｉ）がマレー人男子 9 人・女子 33 人、華人男子 20 人・女子 31 人、インド人女子 1 人、その他女子 2 人の計 96 人、（ⅱ）が華人男子 34 人・女子 69 人、インド人女子 1 人の計 104 人、（ⅲ）がマレー人女子 97 人で構成される。第 1 次調査の対象は合計 297 人である。

写真 3-12　マリム・ナワールの校舎配置図

写真 3-13　タッヤの校舎および寮の配置図

写真 3-14　ペイ・ユエンでの予備調査

写真 3-15　タッヤにおける第 1 次調査

写真 3-16　マリム･ナワールにおける第 1 次調査

第 1 次調査の手順は次の通りである。まず、予備調査として実施した参与観察と進路指導担当者およびカウンセラーに対する面接調査と、第 1 章で紹介した各種先行調査の質問項目等を参照して、質問紙を作成した（2001 年 9 月～10 月）（**参照　第 3 章第 1 節**）。あらかじめパイロット・スタディを行い（2002 年 7 月～8 月）、対象校の生徒や教師から、内容・構成や設問の方法などについて助言を得て、最終版の質問紙を作成した（**参照　付録 8**）。第 1 次調査では、調査条件を均一化するために、一斉に調査可能な大講義室、集会場や大教室などを利用することとなった。質問紙で用いられた言語は、マレー語（マレーシア語）である。なお、学校に協力を要請した後に調査を実施したため、回答率は 100％であった。

第 1 次調査の概要

テーマ：「後期中等学校生徒の進路選択とその影響要因」

目的（共通）：マレーシア・ペラ州において、後期中等学校の生徒（フォーム・ファイブ）が展望する進路と進路選択の動機や理由、それらに見られる男女別・エスニック集団別の差異について明らかにする。

第 1 次調査（共通）
方法：学校における質問紙調査（自記式、集合調査）
対象：公立の後期中等学校 3 校、フォーム・ファイブ生徒（男女）297 人

日時と場所：
パイロット調査　①2002 年 7 月 23 日（火）ペイ・ユエン
②2002 年 8 月 7 日（水）タッヤ
本調査　①2002 年 8 月 15 日（木）タッヤ
②2002 年 8 月 19 日（月）ペイ･ユエン
③2002 年 8 月 28 日（水）マリム･ナワール

調査項目（共通）：
ア．調査対象者の背景に関する質問
本人のプロフィール（性別、エスニシティ）：設問(1)～(4)
社会的状況 - 両親の職業・教育、使用言語、住所：設問(5)～(6)
経済的状況 - メール、コンピューター、携帯電話：設問(7)～(9)

イ．進路に関する質問
現在の中等学校を選んだ理由：設問 1
進路展望（進学・専攻分野）とそれを選んだ理由：設問 2,3,5,6,7
進路展望（就職）とそれを選んだ理由：設問 2,4
将来希望する職業と選んだ理由：設問 8,9
進路相談（相談相手・頻度、情報収集の方法）：設問 10,11,12

ウ．固定的性役割に対する意見および態度に関わる質問：設問 13～27
高等教育と性役割観に関する意見：設問 13～16
マレーシアの伝統的性役割観に対する意見：設問 17～18
リーダーシップをとるのにふさわしい性別：設問 19～22
職業イメージ：設問 23
差別の有無：24～27

以下では、マレー語で行った質問紙調査の結果を示すが、それに先立ち質問紙における選択肢の順序に不適切な箇所があったことを付記しておく。設問 13～18 で、対象者自身の意見を、「a. sangat setuju　非常に賛成」、「b.setuju　賛成」、「c. tidak setuju　賛成しない」、「d. tidak sangat setuju　あまり賛成しない」および「e. tidak pasti 分からない」という 5 つの選択肢を用意して質問した。賛成派にあたる「a. sangat setuju　非常に賛成」と「b.setuju　賛成」という配列との対称性を考慮すると、反対派の配列も、

本来は「c. tidak setuju　賛成しない」と「d.tidak sangat setuju　あまり賛成しない」とすべきであったが、質問紙上では選択肢の配列が逆となった。そのため、回答者に誤解を与えた可能性があると考えられる。

このような点を踏まえて、第 1 次調査の主な調査項目は、調査対象者の背景、進路（展望)、固定的性役割に対する意見および態度などについてである。具体的には、後期中等学校を修了した後に進学するか就職するか、進学する場合にどのような高等教育機関を希望するか、希望する専攻分野は何か、など進路選択の希望・展望に関する質問項目から構成される。それらの質問への回答について、男女別、エスニック集団別、学校別に対比することによって、各分析カテゴリー別の進路分化が認められるか、認められるとすればどのような分化か、分化を生じさせる要因は何かについても記述・説明する。主な分析カテゴリーはジェンダーとエスニシティであるが、可能な限り学校間および階層間の異同についても考察する。

なお、第 2 次調査では、質問紙調査を補完する面接調査を実施する。第 2 次調査では、第 1 次調査から有意抽出した生徒約 40 人を対象とするが、補足的に第 2 次調査の対象の内の生徒 4 人の家庭を訪問し､家族も交えてインタビューする(2002 年 8 月 22 日～9 月 6 日)。第 2 次調査の結果については次章にゆずるが、本章でも第 1 次調査の結果を補うために適宜参照する[18]。

2.　サンプル・プロフィール

生徒のプロフィール（設問(1)～(4)）は、**表 3-10** の通りである。サンプル選定の際に、優先的に女子を対象とし、マレー人と華人の女子生徒数を同数程度にすることに留意した。本研究の主題が、女性内部の進路形成に見られる差異を分析することにあるためである。また、可能な限り自然科学系と人文科学系のクラスを均等にし、必ずしも成績の優秀なクラスだけを調査対象にしないように心がけた[19]。その結果、男子のサンプル数（特にマレー人男子）に偏りが見られた[20]。したがって、サンプル数の少ないマレー人男子とマレー人女子との対比についての分析は、本研究では仮説として留める。同様の理由により、マレー人と華人以外のサンプルも分析の対象から外した。

また、家庭で使用する言語（設問（5)）に関する質問から、家庭で英語による教育を受けている生徒(English Educators)が 4 人、母語と英語を併用している生徒が 4 人いたが、

表 3-10　サンプル・プロフィール（性別、エスニック集団別）　（単位　人）

	マレー人	華人	インド人	その他	合　計
男	9	54	0	0	63
女	133	100	2	2	237
合　計	139	154	2	2	297

表 3-11　父親の教育　（単位　人、%）

	ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ 6	前期中等	後期中等	ﾃﾞｨﾌﾟﾛﾏ	大学学位	修士・博士	無回答
ﾀｯﾔ	6(6.1)	9(9.3)	41(42.3)	19(19.6)	13(13.4)	4(4.1)	5(5.2)
ﾍﾟｲ･ﾕｴﾝ	29(27.9)	41(39.4)	26(25.0)	2(1.9)	1(0.1)	0(0.0)	5(4.8)
ﾏﾘﾑ･ﾅﾜｰﾙ	31(32.3)	32(33.3)	24(25.0)	3(3.1)	1(1.0)	0(0.0)	5(5.2)

表 3-12　母親の教育　（単位　人、%）

	ｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ 6	前期中等	後期中等	ﾃﾞｨﾌﾟﾛﾏ	大学学位	修士・博士	無回答
ﾀｯﾔ	9(9.3)	8(8.2)	52(53.6)	17(17.5)	9(9.3)	0(0.0)	2(2.1)
ﾍﾟｲ･ﾕｴﾝ	43(41.3)	35(33.7)	20(19.2)	1(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	5(4.8)
ﾏﾘﾑ･ﾅﾜｰﾙ	40(41.7)	21(21.9)	22(22.9)	4(4.2)	1(1.0)	0(0.0)	8(8.3)

家庭で英語を用いるサンプル数の全体に占める割合は少ないため、エスニック集団内部の言語による差異については論じていない。

生徒の社会・経済的背景から社会階層を推定するために、両親の教育や居住地（住所）についても質問した。父親の教育（表 3-11）については、タッヤに通う生徒の父親の教育歴が最も高く、ペイ・ユエンやマリム・ナワールに通う生徒の父親の教育歴はタッヤの父親の教育歴ほど高くはない。タッヤの生徒の父親は、後期中等教育 42.3%（41 人）、ディプロマ 19.6%（19 人）、大学学位 13.4%（13 人）、修士・博士学位 4.1%（4 人）の順に多い。それに対して、ペイ・ユエンやマリム・ナワールに通う生徒の父親の教育歴は、前期中等教育が最も多く、それぞれ 39.4%（41 人）、33.3%（32 人）である。また、後期中等教育を受けた父親はペイ・ユエンもマリム・ナワールも 25%ずついるが、タッヤ 42.3%に比して教育歴は低い。

母親の教育（表 3-12）については、父親以上に学校差が顕著である。タッヤに在学する生徒の母親の教育歴は、父親同様、後期中等教育が多く 53.6%（52 人）、ディプロマ 17.5%（17 人）、大学学位 9.3%（9 人）が続く。一方、ペイ・ユエンとマリム・ナワールは、初等教育段階のスタンダード･シックスまでの教育を受けた母親が最も多く、それぞれ 41.3%

（43 人）、41.7%（40 人）である。前期中等教育まで受けた母親はペイ・ユエン 33.7%（35 人）の方が、マリム・ナワール 21.9%（21 人）より多いが、後期中等教育を受けた母親の割合は両校ともあまり高くない。概して、タッヤの母親の教育歴が高く、それにペイ・ユエン、マリム・ナワールの順で続く。

調査対象校の所在地は、タッヤが都市、ペイ・ユエンが小都市、マリム・ナワールが都市郊外（luar bandar）である。マレーシアにおいて、生徒の出身地（家族の居住地）は、必ずしも学校周辺にあるとは限らず、特に進学校であるほどそうである。たとえば、タッヤは、全寮制で学業成績が高い生徒が集まる“有名校”“エリート校”“進学校”であるため、ペラ州全域から生徒が集まっている。それに対して、ペイ・ユエンは小都市カンパール周辺、マリム・ナワールは農村部の生徒と、学校周辺に居住している生徒が多い。

さらに、家庭の経済状況について、コンピューター、携帯電話やメールアドレスを所持しているか否かという点から調べた[21]。コンピューターを所持している割合は、全体の 58%（170 人）に上り、とりわけ、タッヤのマレー人女子生徒で所持率が高く 73.2%（71 人）、ペイ・ユエン華人男子 60.6%（20 人）、ペイ・ユエン華人女子 52.9%（37 人）と続く。マリム・ナワールの華人生徒も 50%台と高い所持率を誇るが、同じ学校でもマレー人生徒の所持率は、男子 44.4%（4 人）、女子 33.3%（11 人）とあまり高くない（表 3-13）。専攻分野別に所持状況をクロス集計すると、自然科学系の生徒の方が、人文科学系の生徒に比べて所持率が高い。また、携帯電話は、全体の 48.1%が所持しており、49.8%（146 人）が所持していない。特に、ペイ・ユエンの華人女子生徒の所持率が 62.9%（44 人）と高く、マリム・ナワールの華人女子と、マレー人男子の所持率は低い。その他は、概して 50%前後の所持率である。

表 3-13　コンピューター所持　（単位　人、%）

	マレー男	マレー女		華人男		華人女		合　計
学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	
あ　る	4(44.4)	71(73.2)	11(33.3)	20(60.6)	11(55.0)	37(52.9)	16(51.6)	170(58.0)
な　い	5(55.6)	23(23.7)	18(54.5)	12(36.4)	9(45.0)	32(45.7)	14(45.2)	113(38.6)
無回答	0(0.0)	3(3.1)	4(12.1)	1(3.0)	0(0.0)	1(1.4)	1(3.2)	10(3.4)
合　計	9(100.0)	97(100.0)	33(99.9)	33(100.0)	20(100.0)	70(100.0)	31(100.0)	293(100.0)

註：MN はマリム・ナワール、Ta はタッヤ、PY はペイ・ユエンの略。以下同。

両親の教育歴や、コンピューターや携帯電話など、一般的に嗜好品とみなされる物品の所持率から調査対象者の階層を推定すると、タッヤのマレー人女子生徒は中間層以上の家庭、ペイ・ユエンとマリム・ナワールの華人女子生徒は中間層・下層の家庭、マリム・ナワールのマレー人女子生徒は下層の家庭出身者が多いと推測できる。加えて、タッヤのマレー人女子生徒の大半は家庭でマレー語を使用し、ペイ・ユエンの華人女子生徒の大半は家庭でも学校でも華語を用いることが多い。それに対して、マリム・ナワールのマレー人女子生徒は家庭でも学校でもマレー語を用い、マリム・ナワールの華人女子生徒は華語を家庭で用いつつ、学校ではマレー語も話す。

本調査の対象を、マレーシア全体の中で位置づけるために、石井によるマレーシアのエスニック関係と社会階層、言語の関係に関する知見を参考にしたい［石井 1999, p. 62. ; 石井 2005, p. 283.］。石井によれば、一般的に、マレー人のあらゆる層が、母語であるマレー語を用いる中で、マレー人の上層と中間層の一部は英語とマレー語を併用し、マレー人の中間層の大半と下層がマレー語のみを用いる。このことから、タッヤのマレー人女子生徒の出身階層は、中間層以上と考えられるが、英語を用いる割合があまり高くないのは、マレー語やアラビア語を重んじる宗教学校に子女を進学させる層であるからと考えられる。一方、マレーシアの華人は、マレー人よりも英語を用いる層の幅が広く、上層と中間層の華人のほとんどが英語を用いる。また、マレー人と異なり、全ての層で華語が用いられるのではなく、華人の上層では英語の方が重用される場合も多い。また、マレー語は、華人の下層部と中間層の一部には浸透していない。それゆえ、本研究の対象となる 2 校の華人女子生徒の内、ペイ・ユエンの華人女子は、華語のみを用いる中間層ないし下層の一部であり、マリム・ナワールの華人女子は、華語とともにある程度マレー語を用いるため、中間層の下部と下層の一部であると予測できる。

以上のことから、マレーシアのペラ州を事例とする本調査から、下記の層の女性の進路形成の一端が明らかにできると仮定する。

（ⅰ）マリム・ナワール

マレー人でマレー語を母語とする中間層（下部）・下層

華人で華語を母語とする中間層（下部）・下層

（ⅱ）ペイ・ユエン

華人で華語を母語とする中間層

（iii）タッヤ

マレー人でマレー語を母語とする中間層（上部）

本調査の結果を、マレーシア全体の事例としてできる限り相対化・一般化するために、適宜先行調査や政府発行の統計資料と対比する。主に用いる先行調査は、チュウ・シン・ブアンら(1995)により 1989 年に実施された調査である。チュウ・シン・ブアンらによる調査は、教育と職業、中等教育と高等教育との接続など、本研究の主題とも重なるテーマに関する調査研究の中で比較的新しい調査である。また、本調査の対象と同じフォーム・ファイブの生徒を対象とする数少ない調査の中で、比較的大規模（フォーム・ファイブのサンプル数は 8,112 人）な調査研究でもある。加えて、筆者自身が、マラヤ大学留学中に、チュウ・シン・ブアンらの研究グループから指導を仰ぐことができたことも理由の一つである。なお、調査の概観については、第 1 章第 3 節に既に記した。

第 3 節　後期中等学校生徒の進路分化

1.　後期中等学校生徒の進路展望

後期中等教育の最終学年であるフォーム・ファイブの生徒に、後期中等教育を修了した後の進路希望について、進学と就職という 2 つの選択肢を挙げ質問した。タッヤの女子生生徒は全員が進学することを希望したのに対して、ペイ・ユエンでは 72.1%（75 人）、マリム・ナワールでは 67.7%（65 人）が進学を希望した。進学を希望する者の男女別内訳は、ペイ・ユエンでは男子 82.4%（28 人）と女子 67.1%（47 人）、マリム・ナワールでは男子 43.8%（14 人）と女子 79.7%（51 人）であった（**表 3-14**）。

チュウ・シン・ブアンらの調査によると、フォーム・ファイブ生徒の 40.8%が中等教育後すぐに進学することを希望しており、53.1%がしばらく働いた後に進学することを希望している[Chew et al. 1995,p.71]。チュウ･シン・ブアンらの調査と比べて、本調査の対象には中等教育修了後に進学を希望する生徒が多い。出身学校や性別による進学先の差異

表 3-14　フォーム・ファイブ修了後に希望する進路　（単位　人、%）

学校名/性別		男	女	合　計
ﾀｯﾔ	進学	-	97(100.0)	97(100.0)
	就職	-	0(　0.0)	0(　0.0)
ﾍﾟｲ･ﾕｴﾝ	進学	28(82.4)	47(67.1)	75(72.1)
	就職	5(14.7)	22(31.4)	27(26.0)
ﾏﾘﾑ･ﾅﾜｰﾙ	進学	14(43.8)	51(79.7)	65(67.7)
	就職	17(53.1)	13(20.3)	30(31.3)

表 3-15　フォーム・ファイブ修了後に希望する進学先（複数回答可）　（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ人男	ﾏﾚｰ人女			華人男			華人女			総　計
進学先	MN	Ta	MN	合　計	PY	MN	合　計	PY	MN	合　計	
公立大学	1	90	14	104(63.0)	1	1	2(3.8)	4	4	8(0.8)	115(35.3)
フォーム 6	5	0	3	3(1.8)	24	1	25(47.2)	15	7	22(22.0)	55(16.9)
私立大学/ｶﾚｯｼﾞ	0	4	7	11(6.7)	6	5	11(20.8)	22	9	31(31.0)	53(16.3)
海外の大学	0	20	1	21(12.7)	0	0	0(0.0)	4	1	5(5.0)	26(8.0)
教員養成ｶﾚｯｼﾞ	1	5	8	13(7.9)	0	2	2(3.8)	0	1	1(1.0)	17(5.2)
ﾂｲﾝ･ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ	0	5	0	5(3.0)	0	1	1(1.9)	5	3	8(8.0)	14(4.3)
その他	1	0	2	2(1.2)	0	3	3(5.7)	3	0	3(3.0)	9(2.8)
分からない	0	4	2	6(3.6)	7	2	9(17.0)	13	9	22(22.0)	37(11.3)
合　計	8	128	37	165(100.0)	38	15	53(100.0)	63	37	100(100.0)	326(100.0)

註：「その他」には、職業学校、技術学校等が含まれる。

については、表に示した（表 3-15）。

調査対象者がフォーム・ファイブ修了後に希望する進学先は大変多様であるが、ある程度の傾向が見て取れる。たとえば、マレー人女子の内、タッヤのマレー人女子の大半（90 人）は、公立大学のマトリキュレーションを志望するが、海外留学を望む女子生徒（20 人）も少なくない。これら公立大学や留学という進路は、マレーシア社会で、言わばエリート・コースと考えられる進路である。マレー人女子の内、マリム・ナワールのマレー人女子は様々な進路を希望しているが、中でも公立大学（14 人）と教員養成カレッジ（8 人）を希望する生徒がやや多い。

学校別の華人の傾向として、ペイ・ユエンでは、男女ともにフォーム・シックスへの進学を希望する生徒が多い（男子 24 人、女子 15 人）という傾向がある。フォーム・シックスは、その修了時に実施されるマレーシア上級教育証書（STPM）試験の成績如何によって、公立大学に入学する可能性を有する進路である。ただし、一般的に、フォーム・ファイブ

修了後にマトリキュレーションに進学する場合に比べて、フォーム・シックスに進学した後の大学進学の方がより困難であるとされる。

チュウ・シン・ブアンらの調査では、マレー人が多くを占めるブミプトラの生徒の 61.3%が大学進学を希望しており、華人生徒の 25.0%とインド人生徒の 29.0%が大学進学を希望する。ブミプトラの生徒に比べて、非ブミプトラ生徒の大学進学を希望する割合が随分低い。また、他の 2 つのエスニック集団と比べて、多くの華人生徒がカレッジへの進学を希望している点も特徴的である[Chew et al.1995,p.74]。エスニック集団別の進路希望に関して、フォーム・ファイブの生徒の進路希望に関する本調査の結果と、チュウ・シン・ブアンらの調査結果は概ね共通している。

さらに、本調査では、華人生徒の多くが私立大学や私立カレッジを志望している。殊に女子でその割合が高く、ペイ・ユエンの華人女子は 22 人、マリム・ナワールの華人女子は 9 人が、私立大学・カレッジを希望している。本調査が示している華人の希望する進学先の特徴は、私立大学・カレッジでは華人の割合が高いというマレーシアの実状や一般的な認識とも合致している。

次に、医学や理学など 15 の選択肢から希望する専攻分野を尋ねた[22] **(表 3-16)**。具体的に、本調査の 3 校を通じて人気が高い上位 3 分野は、会計学 15.2% (59 人)、コンピューター・IT 12.1% (47 人)、医学 10.6% (41 人) である。チュウ・シン・ブアンらの調査によると、1989 年当時にフォーム・ファイブの生徒に人気が高い分野は、商学 20.1% (1,318 人)、法学 16.1% (1,057 人)、工学 13.9% (912 人) であった[Chew et al.1995, p.72]。チュウらの調査と本調査の両方において、フォーム･ファイブ生徒に人気がある分野は、マレーシア社会で特権的な地位の職業に就く可能性が高い分野である。ただし、本調査では、新しい分野であるコンピューター・IT分野の人気が高くなっており、このことはチュウらの調査では見られなかった特徴であり、時代背景を反映していると言える。

表 3-16　希望する専攻分野 (複数回答可)　　(単位　人、%)

	ﾏﾚｰ人男	マレー人女		華人男		華人女		合　計
分野＼学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	
自然科学	2(28.6)	52(37.7)	10(26.3)	24(68.6)	5(55.6)	40(57.1)	18(45.0)	151(44.8)
人文科学	5(71.4)	86(62.3)	28(73.7)	11(31.4)	4(44.4)	30(42.9)	22(55.0)	186(55.2)
合　計	7(100.0)	138(100.0)	38(100.0)	35(100.0)	9(100.0)	70(100.0)	40(100.0)	337(100.0)

また、本調査において、3校とも、マレー人は人文科学系、華人は自然科学系を希望する割合が高い。チュウらの調査においても、エスニック集団別に希望する専攻分野の特徴が認められた。それによると、ブミプトラ生徒では、法学19.0%、工学15.4%、商学13.7%、華人生徒には商学35.4%、社会科学19.9%、工学10.4%、インド人生徒では、法学21.4%、商学16.9%、工学15.1%の順で人気が高かった[Chew et al.1995,p.75]。

一方、本調査においては、上位 3 分野を希望する生徒の中に、マレー人女子が多い。この点は、マレー人女子生徒が教育学を希望する傾向が強いと指摘してきた先行研究の成果とは異なる様相を示した。だが、同じマレー人女子の中にも、進学校であるタッヤと、学業達成度が必ずしも高くないマリム・ナワールでは相違が見られる。タッヤにおいては、自然科学系を中心としたバラエティに富んだ専攻を希望する人数が多い一方、マリム・ナワールにおいては、伝統的に「女性職」とみなされてきた教師になるために教育学を選ぶ人数が最も多かった[23]。

具体的には、エスニック集団別・学校別に女子生徒の回答において、タッヤのマレー人女子には、会計学（27人）、医学（19人）、法学（18人）に次いで、理学（12人）、経済学（12人）に人気がある。その一方、マリム・ナワールのマレー人女子には、教育学（10人）とコンピューター・IT（7人）、商学（6人）、文学（5人）などを希望する生徒が多い。一方、ペイ・ユエンの華人女子は、コンピューター・IT（15人）、医学（12人）、会計学（10人）などを好むとともに、マリム・ナワールの華人女子でも会計学（16人）、コンピューター・IT（9人）などを希望する生徒が多い。

2. 進路選択の要因

対象者が現在在学している中等学校を選んだ理由（設問1）について質問したところ、本調査の回答では、「家の近くにあること」23.4%（113人）、「家族の意見」21.5%（104人）、「統一試験の結果による」15.7%（76人）、「興味」12.2%（59人）、「学習環境のよさ」11.2%（54人）などの回答が上位を占めた。マレー人生徒と華人生徒の回答を対比すると、「家族の意見」と「統一試験の結果による」という選択肢が、共通して多くの生徒に選択された。だが、「興味」と回答したマレー人生徒が多かったのに対して（マレー人生徒 18.4%（46人）、華人生徒 5.6%（13 人））、「家の近くに学校がある」と答えたのは華人生徒の方が多かった（マレー人生徒15.6%（39人）、華人生徒31.8%（74人））。

次に、中等後教育あるいは高等教育に進学を希望する理由（設問 3、表 3-17）について質問した。チュウ・シン・ブアンらの調査においては、高等教育ニーズに及ぼす影響は、学業達成度、本人の教育に対する態度、親（父親）の所得などの社会・経済的地位、政策などの要因が強調されている[Chew et al. 1995, pp.70-81]。ところが、フォーム・ファイブの生徒自身が、なぜ高等教育進学を望むのかという進学の動機に関する質問は設けられていない。そのため、本調査では、高等教育に進学を希望する理由・動機についてフォ

表 3-17　　進学を希望する理由（複数回答可）

（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ男	マレー女		華人男		華人女		ｲﾝﾄﾞ女	その他	合　計
学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	MN	MN	
SPM の結果	6	66	17	10	3	23	14	0	0	139(33.6)
教師の意見	0	4	0	0	0	1	0	0	0	5(1.2)
ｶｳﾝｾﾗｰの意見	0	5	0	1	1	2	2	0	0	11(2.7)
家族の意見	1	25	2	4	1	5	4	0	0	42(10.1)
興味	1	58	10	8	2	26	11	1	0	117(28.3)
家族の背景	0	8	1	1	0	1	0	0	0	11(2.7)
就職の機会	2	37	7	7	1	17	5	0	0	76(18.4)
その他	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2(0.5)
分からない	0	0	1	2	1	3	1	0	0	8(1.9)
無回答	0	0	0	1	0	1	0	0	1	3(0.7)
合　計	10	203	38	36	9	79	37	1	1	414(100.1)

表 3-18　　就職を希望する理由（複数回答可）

（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ男	マレー女		華人男		華人女		ｲﾝﾄﾞ女	その他	合計
学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	MN	MN	
SPM の結果	3	－	2	1	3	2	0	－	－	11(15.7)
教師の意見	0	－	0	0	0	0	1	－	－	1(1.4)
ｶｳﾝｾﾗｰの意見	0	－	0	0	0	1	0	－	－	1(1.4)
家族の意見	0	－	1	3	4	3	1	－	－	12(17.1)
興味	1	－	2	0	3	8	1	－	－	15(21.4)
家族の背景	0	－	5	1	3	3	0	－	－	12(17.1)
その他	0	－	0	0	1	6	0	－	－	7(10.0)
分からない	0	－	3	1	3	3	0	－	－	10(14.3)
無回答	0	－	0	0	0	0	1	－	－	1(1.4)
合　計	4	－	13	6	17	26	4	－	－	70(99.8)

ーム・ファイブの生徒に尋ねることとした。その結果、3 校を通じて、「マレーシア教育証書（SPM）試験の結果による」33.6%（139 人）、「興味」28.3%（117 人）、「就職の機会」18.4%（76 人）と回答した生徒が多い。進学を希望する理由について際立った学校差は認められないが、タッヤの生徒の大半は、生徒自身の能力や興味に関わる選択肢を選んだ。それに対して、ペイ・ユエン、マリム・ナワールでは、就職の機会がよりよくなることを願って進学を希望する生徒が少なくなかった。

一方、就職を希望する理由（設問 4）として、「興味」21.4%（15 人）、「家族の意見」17.1%（12 人）、「家族の背景」17.1%（12 人）、「SPM の結果」15.7%（11 人）などが上位を占めた。進学を望む理由に比べて、「家族の背景」や「家族の意見」など、本人以外の要因を挙げる生徒が目立った。こうした回答の中には、家が自営業のため等といった回答も含まれる（表 3-18）。また、「分からない」14.3%（10 人）という回答が少なくなかったのも、就職を希望する生徒に見られる特徴であることから、その大半は、まだ明確な理由をもって進路展望していないと言える。

本調査において、進学を希望する理由（設問 3）と就職を希望する理由（設問 4）に関する回答から、概して、本人の興味・関心が重要な進路選択の要因になっていると言える。しかしながら、進学を希望する生徒にとって、学業成績の結果や自分自身の興味・関心などの本人に関わる要因が重要となるのに対して、就職を希望する生徒にとっては、本人以外の要因が重要になっている。第 2 次面接調査においても、家族が自営業を営んでいるため家業を継がなければならない場合には、成績のよしあしにかかわらず就職を希望するという事例が目立った。また、タッヤの生徒よりも階層の低いマリム･ナワールやペイ・ユエンの生徒の回答の中には、進学を希望する場合も就職を希望する場合も、職業機会が広がることが進路選択の重要な要因になっている。

さらに、当該専攻分野を選ぶ理由（設問 7）について、回答者のほぼ半数である 48.0%（188 人）が、自らの「興味」に基づくと答えた。続いて「試験の結果」23.0%（90 人）と答えた生徒も多い。ただし、「試験の結果」を挙げた回答は、試験結果が芳しくないために専攻分野の範囲を自ら狭める場合と、よい成績を収めることを予測して、医学、法学など合格が困難で社会的な地位の高い分野を選ぼうとする場合とに分けられる。専攻分野を選ぶ際に、「就職の機会」が広がること 16.1%（63 人）を理由として挙げる回答者も少なくない。

3. 進路相談

本調査の対象者は、SPM を直前に控えたフォーム・ファイブの生徒であるため、進路相談の頻度（設問 10）は、概ね高い（**表 3-19**）。殊に、タッヤのマレー人女子が頻繁に相談しているが、各学校の華人男女は時々相談する程度である。とりわけ、華人男子は、マレー人男子・女子や華人女子に比べて相談する頻度が低いと言える。

本調査において、進路を相談する相手として圧倒的に多いのが「友人」36.8%（203 人）であり、「母親」18.5%（102 人）、「父親」13.6%（75 人）がその後に続く（**表 3-20**）。だが、進路指導カウンセラーを含めた「教師」2.9%（16 人）に相談する割合は低い。学校別

表 3-19　　進路相談する頻度　　（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ男	マレー女			華人男			華人女			ｲﾝﾄﾞ女	合　計
学校名	MN	Ta	MN	計	PY	MN	計	PY	MN	計	MN	
いつも	2	52	12	64(48.9)	6	2	8(14.8)	11	6	17(16.8)	1	92(31.0)
時々	6	35	14	49(37.4)	16	10	26(48.1)	53	16	69(68.3)	1	151(50.8)
ほとんどない	0	7	3	10(7.6)	10	4	14(25.9)	5	5	10(9.9)	0	34(11.4)
ない	1	3	5	8(6.1)	2	3	5(9.3)	1	2	3(3.0)	0	17(5.7)
無効・無回答	0	0	0	0(0.0)	0	1	1(1.9)	0	2	2(2.0)	0	3(1.0)
合　計	9	97	34	131(100.0)	34	20	54(100.0)	70	31	101(100.0)	2	297(99.9)

表 3-20　　進路相談する相手（複数回答可）　　（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ男	マレー女		華人男		華人女		ｲﾝﾄﾞ女	合　計
学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	MN	
父親	4	33	9	4	4	14	6	1	75(13.6)
母親	2	39	17	3	3	30	7	1	102(18.5)
兄	0	12	6	4	1	7	1	0	31(5.6)
姉	1	22	4	2	1	11	6	1	48(8.7)
教師	1	5	2	3	1	2	2	0	16(2.9)
ｶｳﾝｾﾗｰ	0	11	0	0	0	2	0	0	13(2.4)
友人	5	66	16	24	13	53	26	0	203(36.8)
塾教師	1	1	1	1	0	8	4	0	16(2.9)
親戚	1	7	1	1	2	8	4	0	24(4.3)
その他	0	4	1	7	4	3	0	0	19(3.4)
無回答	0	0	0	0	0	2	3	0	5(0.9)
合　計	15	200	57	49	29	140	59	3	552(100.0)

に見ると、タッヤの女子生徒が両親双方に相談する割合が高いのに対して、その他の学校の女子生徒は、母親に相談する割合が父親のそれに比べて高い。また、女子生徒と異なり、男子生徒はどのエスニック集団でも友人に相談する割合が高く、家族に相談する割合が低い。ただし、親のどちらかに相談する場合に限れば、父親と母親にほぼ同程度で相談している。したがって、男子生徒よりも女子生徒の方が、親が伝達しようとする事柄（進路に関することだけでなく、性役割観なども）が浸透しやすく、それは階層が高くなるほど顕著であると予測できる。

チュウらの調査においても、進路指導や進路相談が、フォーム･ファイブ生徒の高等教育の選択に与える影響は大きい。そのような先行研究の知見に立ち、本調査でもチュウらの調査と同様の調査項目を設定し対比を試みた。進路指導や進路相談の頻度と相談する対象に関する質問の結果によると、フォーム・ファイブの生徒の 36.9%が親や親戚に相談しており、教員（26.1%）、進路指導担当教員（15.6%）が続く。チュウらの調査では、教員や進路指導担当教員に相談している割合が高いことが示されているが、本調査では、友人やクラス･メートに相談している割合が高い。また、本調査においては男子生徒の方が友人に相談する傾向が強く、女子生徒の方が家族に相談する傾向が強かったが、チュウらの調査においては、家族に相談する割合は男女とも同程度であり、友人に相談する割合はむしろ女子生徒の方が高かった。さらに、チュウらの調査において、エスニック集団別に対比した結果、教員や進路指導担当教員に相談する傾向が高いのはブミプトラ生徒とインド人生徒であり、親や親戚に相談する割合が高いのは華人生徒である。加えて、華人生徒は他のエスニック集団に比べて、友人やクラスメートに相談する割合が高い[Chew et al. 1995, pp.45-50]。

第 4 節　後期中等学校生徒の性役割観

1.　固定的性役割に対する意識

本項では、第 1 次調査の結果を示すとともに、第 1 章第 3 節で概観した、ジャマイラ・アリフィンの調査（1994 年～1995 年実施）の結果と対比しながら、フォーム・ファイブの生徒の性役割観と進路選択の関係について明らかにする。ジャマイラ・アリフィンの調査

対象は、半島マレーシアの 25 歳から 55 歳までの既婚の成人男女 2,957 人であるため、学齢期のフォーム・ファイブ生徒を対象とする本調査の結果とは相違が見られると予測する。

本調査においては、まず、日本や欧米あるいはマレーシアにおいて、固定的・伝統的性役割観を表現する際に頻繁に用いられる２つの考え方に対する生徒の意識を尋ねた。1つ(設問 17)は、「女性は主婦として家庭で働く一方、男性は家の外で働くのに適している(wanita sesuai kerja di rumah sebagai suri rumah tangga, manakala lelaki bekerja di luar rumah)」という考え方、すなわち日本では「男は外、女は内」と表現される性別役割分業観についての質問である（表 3-21 上段)。

性別役割分業観に関する質問に対して、「賛成しない」40.3%（118 人）および「あまり賛成しない」20.8%（61 人）と回答した生徒は、全体の 61.1%に上る。マレー人女子生徒と華人女子生徒を比べると、マレー人女子生徒の賛成派は 29.2%（38 人)、反対派は 62.3%（81 人）であり、華人女子生徒の賛成派は 17.0%（17 人)、反対派は 69.0%（69 人）である。マレー人女子生徒に比べて、華人女子生徒の方に反対派が多い。特に、タッヤのマレ

表 3-21　性役割をめぐる価値観

上段：「女性は主婦として家庭で働く一方男性は家の外で働くのに適している」
下段：「女性はいかに高い教育を受けても最後は台所に」

（単位　人、%）

	ﾏﾚｰ男	マレー女		華人男		華人女		合　計
選択肢　　学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	
とても賛成	2	1	3	2	1	1	0	10(　3.4)
賛成	4	24	10	8	8	13	3	70(23.9)
賛成しない	1	47	19	13	3	21	14	118(40.3)
あまり賛成しない	0	15	0	8	4	23	11	61(20.8)
分からない	2	8	1	3	4	11	2	31(10.6)
無効・無回答	0	2	0	0	0	0	1	3(　1.0)
小　計	9	97	33	34	20	69	31	293(100.0)
	ﾏﾚｰ男	マレー女		華人男		華人女		合　計
選択肢　　学校名	MN	Ta	MN	PY	MN	PY	MN	
とても賛成	1	5	1	2	0	1	1	11(　3.8)
賛成	3	20	7	5	7	8	1	51(17.4)
賛成しない	4	40	12	17	4	39	11	127(43.3)
あまり賛成しない	0	25	8	5	4	11	14	67(22.9)
分からない	1	5	3	5	5	8	3	30(10.2)
無効・無回答	0	2	2	0	0	2	1	7(　2.4)
小　計	9	97	33	34	20	69	31	293(100.0)

一人女子生徒（62 人）、マリム・ナワールの華人女子生徒（25 人）とペイ・ユエンの華人女子生徒（44 人）に反対派が多く、男子生徒の中では、ペイ・ユエンの華人男子生徒（21 人）に反対派が多かった。一方、「賛成」23.9%（70 人）と「とても賛成」3.4%（10 人）を選んだ回答者も少なくないが、マリム・ナワールのマレー人男子生徒、華人男子生徒、マレー人女子生徒は、賛成派が多いか両派が拮抗していた。

マレーシアの成人男女を対象とするジャマイラ・アリフィンの調査においても、性別役割分業に関わる質問がある。その結果によると、男性には賛成派（54.4%）の割合が高い一方、女性は賛成派 48.5%と反対派 51.5%の割合が拮抗している（**表 1-4**）。特に、マレー人男性の中で性役割に賛成する割合が高い（57.7%）。また、同一エスニック集団内で男女差が大きいのはマレー人で、男女の役割分業観の賛成派はマレー人男性 57.7%とマレー人女性 49.1%である。一般的に、マレー人女性は、性役割観を遵守する傾向が非常に強いと考えられてきたが、そのような従来型のマレー人女性のイメージとは異なる様相を呈することをジャマイラ・アリフィンの調査は示している。また、筆者による調査の結果も同様である。その上、全ての性別・エスニック集団の若年層に、性別役割分業に反対する割合が増加している。

本調査において性役割観をたずねるもう 1 つ（設問 18）の質問項目は、マレー社会で伝統的に言われてきた「女性はいかに高い教育を受けても最後は台所に（wanita mengaji tinggi-tinggi akhirnya kedapur jua)」という考え方についてである。全体の回答は、賛成派 21.2%（62 人）よりも、反対派 66.2%（194 人）の方が圧倒的に多い（**表 3-21 下段**）。マレー人女子生徒と華人女子生徒の回答は、上述した 1 つ目の質問への回答と異なっている。マレー人女子生徒全体の 25.4%（33 人）が賛成派であるのに対して、華人女子生徒は 11%（11 人）程度が賛成派である。反対派はマレー人女子生徒が 65.4%（85 人）、華人女子生徒が 75%（75 人）である。1 つ目の質問と同様に、華人女子生徒の方に固定的性役割観に対して反対する割合が高いが、1 つ目の設問に比べて、全体的に反対派の割合が若干増えた。このことは、マリム・ナワールのマレー人女子生徒、ペイ・ユエンの華人女子生徒の中で反対した生徒が増えたことによる。つまり、「性役割観は尊重すべきであるが、女性が高い教育を受けた場合は、必ずしも性役割観に従順である必要はない」という考えを持つ女子生徒が幾分いることの表れであると解釈できる。なお、2 つの質問ともに、学校種別で際立った特徴は見られなかった。

2.　高等教育の意味―「よい父親・母親」像、「よい夫・妻」像―

女子生徒は、高等教育や就職の意味を、自らの生涯設計においてどのように捉えているだろうか。それを明らかにするために、フォーム・ファイブとフォーム・シックス修了後の進路について、性役割観を手がかりに4つの質問をした。それは、「よい父親や夫になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、高等教育を受ける必要があるかどうか」、「よい母親や妻になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、高等教育を受ける必要があるかどうか」という性役割観と高等教育観についての質問と、「よい父親や夫になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、就職する必要があるかどうか」、「よい母親や妻になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、就職する必要があるかどうか」という性役割観と職業観に関する質問群（計4設問）である（**表3-22**）。これら一連の質問には、筆者が進路指導担当者および進路指導カウンセラーに対して実施した予備的面接調査（2001年9月実施）によって導き出した仮説、すなわち、「男らしさ」や「女らしさ」などのジェンダー規範や性役割観と高等教育観（特に、高等教育への要求）との間に、何らかの関係性があるのではないかという仮説を検討する意図があった[24]。なお、同様の質問項目を設けていたジャマイラ・アリフィンの調査結果との対比については後述する。

まず、男性が「よい夫」や「よい父親」になるためには、高等教育が重要という質問に対して、「とても賛成」42.3%（124人）と「賛成」28.0%（82人）という回答を合わせると、実に全体の70.3%（206人）に上る（**表3-22-Ⅰ**）。それに比べて、男性にとって就職することが重要と答えた男子生徒・女子生徒は42.6%（125人）で、反対派39.9%（117人）

表3-22　よい父親・母親像と高等教育および就職　　（単位　人、%）

性別	男		女	
選択肢　　設問	Ⅰ高等教育	Ⅱ就職	Ⅲ高等教育	Ⅳ就職
とても賛成	124(42.3)	59(20.1)	84(28.7)	30(10.2)
賛成	82(28.0)	66(22.5)	106(36.2)	75(25.6)
賛成しない	31(10.6)	70(23.9)	47(16.0)	87(29.7)
あまり賛成しない	20(6.8)	47(16.0)	16(5.5)	43(14.7)
分からない	27(9.2)	45(15.4)	36(12.3)	52(17.7)
無効・無回答	9(3.1)	6(2.0)	4(1.4)	6(2.0)
合　計	293(100.0)	293(100.0)	293(100.0)	293(100.0)

と同程度である（表 3-22-Ⅱ）。

次に、女性が「よい妻」や「よい母親」になるために、高等教育を受けることを重要視するという回答は、「とても賛成」28.7%（84 人）の割合こそ男性に対する回答より低いが、「賛成」36.2%（106 人）と合わせると 64.9%に上る（表 3-22-Ⅲ）。ところが、女性が就職することに「賛成しない」29.7%（87 人）という回答が多く、「あまり賛成しない」14.7%（43 人）という回答と合計すると、反対派 44.4%（130 人）は賛成派 35.8%（63 人）を上回っている（表 3-22-Ⅳ）。女性が就職することについては、毎年卒業生のほぼ全員が進学するタッヤのマレー人女子生徒の中には、反対意見が多かった（50 人）。これは、自らの進路を肯定しようとする意味合いが回答に含まれるとともに、性役割を果たすために職を得るという価値観よりも、性役割を果たすために高等教育に進学するという価値観の方が、タッヤの生徒に違和感なく浸透しているためと捉えられる。その上、タッヤのマレー人女子生徒の両親の教育歴が高いことも、より高い教育歴を志向する一因になっていると言えよう。

第 1 章第 3 節で紹介したジャマイラ・アリフィンの調査によると、「女性はよい妻、よい母になるために大学教育を受けるべきである」という質問に対して、男性では反対派 41.7%と賛成派 47.9%、女性では反対派 47.9%と賛成派 52.1%という結果が示されている（表 1-3）。どちらかと言えば、男性の方に賛成派が若干多い。また、性役割を守るために大学教育を重視する傾向が強いのは、マレー人である。筆者の調査対象の方が、女性がよい妻・よい母になるために高等教育に進学するという意見に賛成する割合が高い（表 3-22-Ⅲ）。この結果は、ジャマイラ・アリフィンが調査を実施した時期よりも、筆者が実施した時期において、より多くの女性が高等教育に進学することになったという状況を反映しているとも考えられる。もしくは、本調査の対象である若年層の方に、性役割に基づく高等教育選択を容認する割合が高いとも解釈できる。ジャマイラ・アリフィンの調査においては、男女それぞれの回答者に尋ねているのに対して、本調査は女性のみを対象としている。だが、本調査においては、男性と高等教育、女性と高等教育という 2 つ質問群を設けることで、ジェンダーの観点からの質問の対称性を考慮した。その結果、女子生徒の性役割と高等教育の関連性に対する意識は、女子生徒よりも男子生徒の方が高いことが示された。ただし、男性に対しては、高等教育だけでなくその後の就職も重要とみなしているのに対して、女性にとっては、高等教育は重要であるが、男性ほどに就職の重要性を認めていない。

上述した第 1 次調査の結果について第 2 次調査から補足すると、女性の役割を全うする

ために、女性に高等教育が重要であると回答する生徒は多いが、その理由には男女差やエスニック集団間差が認められる。たとえば、インタビューしたマレー人女子生徒たちの中には、男女は同じ教育を受けられるという考えを持ちながらも、女性が選ぶべき進路は、女性の家庭における役割遂行を阻まない程度や範囲であるべきだと考える生徒や、「男性は『家庭の長・一家の大黒柱（ketua dalam rumah tangga)』として、女性は『夫を助けるために（bantu suami)』高等教育が重要だ」と述べる生徒が多かった[25]。加えて、他の設問に対しては、同じマレー人女子生徒の中でも、タッヤとマリム・ナワールの生徒の回答が異なる場合が多かったが、性役割観と高等教育アスピレーションの関係を問う本設問群に対する回答は、両校のマレー人女子生徒の回答が似通っていた。それゆえ、マレー人女子生徒は、女性の役割を守るためにも高等教育に進学するという共通した価値観を持っていると考えられる。

3.　リーダーシップと性役割観、性差別

第 1 次調査では、性役割観について多角的に問うために、調査対象者に対して、リーダーシップを執るのに適している性別について尋ねた。質問は、家庭、学校、コミュニティ、マレーシア社会という 4 つの場所別に設けた（設問 19～22）**(表 3-23)**。これら一連の設問群は、設問 17 や 18 で尋ねた性別役割分業に関わる生徒たちの意識をより深く明らかにすることをねらいとする。

まず、家庭におけるリーダーシップを男性が執るべきであるとする意見は、全体の 73.7%（219 人）にも上った。この割合は、学校、コミュニティ、マレーシア社会など、家庭以外の場所における割合と比べて最も高い。第 2 次調査では、「家庭の外で、何らかの形で女性がリーダーシップを発揮することになったとしても、『家庭の長』は常に男性である」と答

表 3-23　リーダーとしてふさわしい性別　　（単位　人、%）

選択肢　　設問	家庭	学校	コミュニティ	マレーシア社会	合　計
男性	219(73.7)	143(48.1)	161(54.2)	197(66.3)	720(60.6)
女性	12(　4.0)	45(15.2)	28(　9.4)	5(　1.7)	90(　7.6)
分からない	56(18.9)	94(31.6)	95(32.0)	83(27.9)	328(27.6)
無効・無回答	10(　3.4)	15(　5.1)	13(　4.4)	12(　4.0)	50(　4.2)
合　計	297(100.0)	297(100.0)	297(100.0)	297(99.9)	1,188(100.0)

えるマレー人女子生徒の意見が多く挙げられた。

次に、学校とコミュニティにおいては、それぞれ 48.3%（143 人）、54.2%（161 人）が、男性がリーダーシップを執るのに適すると回答した。学校とコミュニティにおいて、女性が適すと答えた生徒もいるが、そのような回答を選んだ意見の中には、「学校は女子ばかりだから」（タッヤのマレー人女子）や「コミュニティは女性のみのコミュニティを指すと思った」（タッヤおよびマリム・ナワールのマレー人女子）など、筆者の質問の意図とは異なって解釈した回答も見られた。

さらに、マレーシア社会において、男性がリーダーシップを執るべきであると回答した割合は 66.3%（197 人）に上る。その一方、マレーシア社会で女性がリーダーシップを執ることについては、その回答が最も少なく 1.7%（5 人）であった。

このように、いかなる場所であっても、男性のリーダーシップを肯定する意見が多い。ただし、学校、コミュニティ、マレーシア社会における質問に対して、「分からない」と答えた割合が 30%前後ずつと高い。「分からない」という選択肢を選んだ理由の中では、「男性・女性ともに能力が兼ね備わっていれば、リーダーになることができる」という意見など、男性か女性かの二者択一で選ぶことが難しく、回答を逡巡したとも考えられる。

学校別に見ると、タッヤは女子校であるため、学校で女子もリーダーシップを執りうると考える生徒が少なくない反面、学校以外の全ての場所で、男子がリーダーシップを執るべきだとする生徒も多かった。マリム・ナワールのマレー人女子も、家庭とマレーシア社会において、男性がリーダーシップを執ることに対してほとんど異論がない。つまり、リーダーシップに関する設問に対して、マレー人女子生徒の学校種別による相違は見られないだけでなく、エスニック集団別の差異もほとんどないと言える。ただし、華人女子生徒に限って言えば、あらゆる場所で女性もリーダーになりうると回答した生徒が一定程度存在した点は、学校でのリーダーシップのみを認める生徒が多いマレー人女子の意見とは異なる。

リーダーシップを問う設問 19～22 に加えて、設問 24～27 で家庭、学校、コミュニティ、マレーシア社会における性差別の有無を尋ねた（**表 3-24**）。その結果、全ての場所で、性差別がないと答えた割合（「ほとんどない」「ない」と回答した数を合算）の方が、あると答えた割合（「いつもある」「時々ある」と回答した数を合算）よりも高い。性差別があるという回答は、家庭 19.2%（57 人）、学校 31.7%（94 人）、コミュニティ 33.0%（98 人）、

表 3-24　性差別の有無と頻度　　（単位　人、%）

選択肢　　設問	家庭	学校	ｺﾐｭﾆﾃｨ	ﾏﾚｰｼｱ社会	合　計
いつも	11（　3.7）	19（　6.4）	25（　8.4）	32（ 10.8）	87（　7.3）
時々	46（ 15.5）	75（ 25.3）	73（ 24.6）	73（ 24.6）	267（ 22.5）
ほとんどない	56（ 18.9）	46（ 15.5）	45（ 15.2）	53（ 17.8）	200（ 16.8）
全くない	141（ 47.5）	103（ 34.7）	74（ 24.9）	52（ 17.5）	370（ 31.1）
分からない	42（ 14.1）	51（ 17.2）	77（ 25.9）	85（ 28.6）	255（ 21.5）
無効・無回答	1（　0.3）	3（　1.0）	3（　1.0）	2（　0.7）	9（　0.8）
合　計	297（100.0）	297（100.1）	297（100.0）	297（100.0）	1,188（100.0）

マレーシア社会 35.4%（105 人）である。これらの結果から、生徒にとって身近な場所から離れるほど、あるいは規模が大きくなるほど、差別があると答える生徒の割合が多くなっている。身近な家庭や学校での差別は自らの体験に基づくのに対して、コミュニティやマレーシア社会における差別は、新聞等のメディアで得た情報から想像している場合が多いことがその理由の一つであると考えられる。

第 5 節　まとめ

本章の目的は、マレーシアの後期中等学校の生徒が、何を動機とし、いかにして進路選択しているかについて明らかにすることであった。予備調査を踏まえた第 1 次質問紙調査の分析の際には、チュウ・シン・ブアンらによる調査（1995）およびジャマイラ・アリフィンによる調査（1998）の結果と対比することによって本調査の結果を相対化させるよう努めた。また、分析に際して、マレーシアに関わる先行研究で専ら用いられてきたエスニシティというカテゴリーだけでなく、ジェンダーというカテゴリーも用いた。

予備調査に基づく仮説および研究設問は、以下の 4 点であった。第 1 に、後期中等学校生徒の進路選択にエスニック集団別の差異が見られるのではないか、第 2 に、後期中等学校生徒の進路選択に男女別に差異が見られるのではないか、第 3 に、エスニック集団別や男女別で進路分化が見られるとすれば、それらを生じさせる理由や背景は何か、第 4 に、それらを生じさせる理由や背景の内もっとも重要な要因は何か、要因の中には、マレーシアの男性や女性に特有の「成功」物語や、教育と職業に対する考え方の影響があるのではないかという 4 点である。それら 4 点に対する第 1 次調査の結果は以下の通りである。

第 1 に、先行研究で指摘されてきたエスニック集団別の進路分化については、筆者が選定した調査対象校 3 校においても確認することができた。特に、後期中等学校のフォーム・ファイブ修了後に、マレー人は公立大学のマトリキュレーション、華人はフォーム・シックスや私立大学・私立カレッジに進学することを希望するという、エスニック集団別の進路分化が認められた。また、希望する専攻分野もエスニック集団別に異なっており、マレー人は人文科学系、華人は自然科学系や経済学・商学などの専攻分野を希望する者が多かった。仮に、このようなエスニック集団別の進路分化を「エスニック・トラック」と呼ぶとすれば、生徒自身は、少なくとも後期中等教育段階で現実のエスニック・トラックに忠実な形で進路を希望していると言える。

第 2 に、エスニック・トラックだけでなく、ジェンダーによる進路分化（「ジェンダー・トラック」）も見受けられた。これまで、マレー人女子生徒の中に教員養成カレッジに進学を希望する生徒が一定程度いることは、ジェンダー・トラックの代表的な例として、マレーシアの先行研究でも指摘されてきた。本調査では、そのジェンダー・トラックを確認した上で、同一のジェンダー内部およびエスニック集団内部における進路の多様性を示した。たとえば、マレー人女子生徒の中でも、高等教育へのアスピレーションが高く、希望する専攻分野も多様である女子生徒の割合が多い一方、男女間で進路にあまり相違がないと考えられてきた華人についても、希望する進学先に若干の相違が見られる。これらの第 1 次調査の結果から、マレー人は性別による進路分化が顕著で、華人は性別による進路の差異はあまり見られないというステレオタイプな見解について異議を唱える可能性を示した。

さらに、先行研究においては、エスニック・トラックとジェンダー・トラックが別々に論じられてきたが、本調査において、エスニック・トラックはジェンダー・トラックと絡み合いながら、「二重のジェンダー化」[26]あるいは「ジェンダー化されたエスニック・トラック（gendered ethnic track)」とも呼ぶべき複雑な様相を呈していることを指摘した。このような複雑な進路分化は、進路選択における学校種別の差異という形でも顕在化しており、殊にマレー人女子生徒（タッヤとマリム・ナワール）の中で、進路展望の相違は明確であった。たとえば、タッヤのマレー人女子は、自然科学系・人文科学系というコースに関係なく多様な進路を希望する反面、マリム・ナワールのマレー人女子は、人文科学系の中でも文学や教育学など、マレー社会で「女性らしい」とされてきた専攻分野を希望する傾向が強かった。

また、華人女子生徒についても、エスニック集団内部で学校種別の差異があり、少なく

とも華人女子生徒に典型的な 2 つの型が認められた。1 つの型は、その性別に関係なく、ブミプトラ政策により被る不利益を、高い教育を受けることで乗り越えようとする型であり、もう 1 つの型は、女子であることと華人であることという 2 つの属性によって「二重の差別」を意識しながらも、それらの差別を受容する型である。前者の固定的性役割に反対する型は、華人コミュニティの中でもより若い世代の女性に見られ、後者の固定的性役割に賛成する型はより上の世代で見られる型であるが、現代の華人女子生徒にも継承されている。なお、華人女子生徒の進路形成に関するより詳細な分類については、第 4 章で面接調査の結果を加えて記述・説明することとする。

第 3 に、エスニック集団別や男女別、学校種別の進路分化の背景について、日本や欧米の先行研究で再三指摘されてきた通り、学業成績などのメリトクラティックな要因が、マレーシアの後期中等学校生徒の進路選択に強く影響を及ぼすと考えられる。その影響は、フォーム・ファイブ後に進学するか就職するかを選択する上でも、また、専門分野を選択する上でも作用している。さらに、メリトクラティックな要因だけでなく、エスニック集団別の要因、性役割観に基づくジェンダーに関わる要因、そして家族の経済的背景に関わる要因などのノン・メリトクラティックな要因が、進路分化を生じさせると考えられる。

第 4 に、第 3 の点とも関連して、マレー人女性の進路選択に影響を及ぼす要因の一つとして、予備調査からは、マレー人女性が特徴的な性役割観を有しているということが示唆されていた。第 1 次調査においても、長い進路形成過程で、女性の教育選択や職業選択の一端を解明するために性役割観の影響は無視できないことが判明した。性役割観が、人生の一時点（第 1 次調査においては後期中等学校修了後）での女性の進路選択に強い影響を及ぼすだけでなく[27]、高等教育を修了した後の職業選択までも見越した生涯設計において引き続き影響を及ぼしていくと予見できる。マレーシアの女性に特有の「成功」物語や、それに対する価値観や、教育と職業に対する考え方については、次章で詳細に論じることとする。

本章では、マレーシアのペラ州で実施した第 1 次質問紙調査の結果において、エスニック集団別・性別・学校種別の進路分化の状況について確認した。そして、エスニシティとジェンダーという二重の教育格差の問題は、階層差とも連動しているとも予測できた。第 1 次調査の結果を踏まえて、次章以降では、第 2 次面接調査と第 3 次追跡面接調査の結果について示すこととする。これら 2 つの面接調査の結果から、性役割観を手がかりとして、

進路分化の背景や要因についてより詳細に検討するとともに（第 4 章)、女子生徒の選択した進路に対する受容や葛藤のあり方について明らかにする（第 5 章)。

註

1　予備的面接調査では、学校の進路指導担当者もしくはカウンセラー（多くは他の教科と兼任）に、約 1 時間から 2 時間ほど、マレー語もしくは英語により自由に話してもらった（2001 年 9 月中旬～下旬)。各々の調査対象者に対する質問項目は、学校の概要と進路の概要に分けられる。詳細については、巻末の付録に記すこととする。

2　マレーシアの全州平均と比べて、ペラ州における初等教育段階の在学者数は国民学校で少なく、国民型学校（華語）と国民型学校（タミル語）で多い。ペラ州における初等学校数の合計は 823 校（15 州中 3 位、以下同）であり、就学者数 272,826 人（4 位)、教師数 15,151 人（5 位）である。その内、国民学校 495 校（15 州中 4 位)、就学者数 185,748 人（6 位)、教師数 10,547 人（6 位）となっている。

3　ペラ州の人口は、主要なエスニック集団の他に、その他 50,000 人、その他のブミプトラ 41,400 人で構成される（1995 年)。

4　筆者は、サンプル校を選ぶ際、モリー・リー教育学部助教授（当時、現ユネスコ・バンコック）から指導や助言を受けた。その上で、予備調査として、ペナン州やクランタン州、ペラ州の教育行政関係者と学校関係者に対して、予備的なインタビューと学校訪問をすることとなった（2002 年 8 月)。また、サンプル選定の際に、華人がマジョリティである中等学校については、杉村美紀（2000)『マレーシアの教育政策とマイノリティ - 国民統合のなかの華人学校 - 』東京大学出版会を、また、マレー人を優遇するために設立された「エリート校」については、竹熊尚夫（1991)「マレーシアにおけるマレー系エリート教育の発展とその特色―全寮制中等学校の場合」『比較教育学研究』第 17 号等を参照した。

5　ペラ州の各中等学校は、グレード A かグレード B に分類される。普通学校は、グレート A の 35 校、グレード B の 15 校であり、技術学校はグレード A の 2 校のみである。また、全寮制宗教学校も、グレード A の 1 校のみである。調査対象の 3 校は、全てグレード A である。ただし、グレードの分類方法についての詳細は不明である。

6　マリム・ナワール中等学校の各クラスにおいて、マレー人が多いクラスでは、男女は隣あって座らず、エスニック集団別かつ性別に幾つかのパートに分かれて座っている。また、筆者が参与観察した授業で、教育の男女差に関してフォーム・ファイブの生徒に意見を求めたところ、「男女差がない」と答える生徒がほとんどであった。男子生徒が「女は家で料理でもしてればいいよ」と冗談めかして言うと、「違うよ」と女子生徒が一斉に反論する場面もあった。

7　ペイ・ユエン中等学校においては、授業中こそ男女別々に座っているが、食事中やその他の活動時には、女子のグループと男子のグループとは混在して座っている。クラス内の席は自ら選ぶことができ、隣同士に座るのは同性であるが、主に 2 人ずつ組になって男女が交互に並んでいる。授業中に、より活動的に発言するのは男子であるが、女子の発言が少ないというほどではない。

8　ペラ州の教育史についての記述は、Persatuan Sejarah Malaysia Cawangan Perak dengan kerjasama Yayasan Perak dan Jabatan Pelajaran Perak(1985)からの引用と「ペラ州教育ギャラリー」(Lebuh Cator 30450 Ipoh）の資料に基づく。資料の提供にあたっては、ペラ州教育局（Jabatan Pendidikan Negri Perak）の方々に協力していただいた。

9　基本的には内政不干渉を貫いていたイギリスが、公式に介入するようになった最初の事例がパンコール条約（1874）である。本条約は、シンガポールの総督と、ペラ王国のマレ

一人および華人の有力者との間に結ばれた条約である。19 世紀後半に、重要な錫の産地であるペラ州には、多数の華人労働者が移住してきており、労働者を組織する秘密結社同士が互いに抗争を続けていた。同時期に、マレー人の間にもスルタンの継承をめぐって内戦が激化していたが、このような両者を調停し受け入れさせたのがパンコール条約であった[綾部・石井編 1982, pp.20-22]。

10 19 世紀後半に設立された英語国民学校（Sekolah Rendah Kebangsaan Inggeris）は、主に英国政府の公務員の子どもを教育するために設立された学校である。

11 ペラ州においては、高等教育機関が設立される以前から、幾つかの教員養成カレッジ（Maktab Penguruan:MP）が設立されていた。たとえば、マレー教員養成カレッジ（MP Matang , Taiping)(1913 年)、スルタン・イドリス教員養成カレッジ(MP Sultan Idris:SITC, Tanjung Malim)（1922 年)、キンタ教員養成カレッジ（MP Kinta, Ipoh)（1957 年)、新イポー教員養成カレッジ（MP Ipoh Baru, Ipoh、1977,1983 年に移転)（1976 年)、フル・キンタ教員養成カレッジ（MP Hulu Kinta, Ipoh)（1980 年）などである。

12 1990 年に、マレーシア全州の普通学校において、在学者数の男女比は 0.95:1 であった。それに対して、ペラ州の在学者の男女比は 0.93：1 であり、全州のそれにほぼ近いと言える。

13 宗教学校の男女比は、全州が 0.81：1 に対して、ペラ州は 0.98：1 であり、マレーシア全州よりもペラ州では宗教学校における男子の割合が高い。同様に、職業学校と技術学校は、それぞれマレーシア全州の男女比が、3.42：1（ペラ州 3.26：1)、男女比 1.78：1（ペラ州 1.45：1）である。程度の差はあるが、職業学校と技術学校で男子生徒の割合が高いという特徴は他の州と共通している。また、全寮制学校の男女比は全州で 1.5： 1 であるのに対して、ペラ州の男女比は 3.89：1 であり、マレーシア全州比とは異なっている。

14 第 1 次調査を実施した第 2 学期前半において、フォーム・ファイブの生徒は、高等教育に進学するためのマレーシア教育証書試験（SPM）を控えていた。通常は、受験後休暇を挟んで、1 月の後半に結果が判明することとなる。

15 SMK Malim Nawar, Sri Mawar 2001 Julid 12.参照。

16 S.M.J.K.PEI YUAN,S.M.J.K.PEI YUAN（培元国中）Majalah Sekolah 2000.と S.M.J.K.PEI YUAN,S.M.J.K.PEI YUAN（培元国中）Majalah Sekolah 2001.参照。

17 Sekolah Raja Perempuan Taayah, Sejarah Perkembangan SEKOLAH RAJA PEREMPUAN TAAYAH 40tahun 1960-2000.と Sekolah Raja Perempuan Taayah, BAKTI 2001.参照。

18 本研究で用いた調査手法は、定性分析と定量分析の併用である［佐藤 1992,pp.46-51］。

19 予備調査やパイロット調査時に訪問したいずれの学校でも、成績優秀クラスをサンプルとして選ぶことを教員から薦められた。しかしながら、各学校におけるサンプルの代表性をできるだけ確保するために、クラスを成績別に特定せずにサンプルを選んだ。

20 調査目的が、女性の進路形成を明らかにすることにあるため、限られた時間で効率よく調査を遂行するべく、男子のみのクラスを調査対象から外して、女子が多いクラスを優先的に調査対象とした。

21 筆者は、家族の所得により家庭の経済状況および階層を調べることが、調査の客観性を維持する上では最適であると考える。しかしながら、両親の所得を正確に把握している生徒が必ずしも多くないため、コンピューターや携帯電話の所持状況から、家庭の経済状況を推測することとした。ただし、近年急激に普及している携帯電話は、固定電話を購入することが経済的に困難であるために利用される場合もある。それゆえ、携帯電話の所有をもって、家庭の経済的に豊かであるとは言えない場合もあった。

22 15 の選択肢は、a.医学（perubatan)、b.理学（sains)、c.数学（matematik)、d.コンピューター・情報技術（komputer/IT)、e.工学（jurutera)、f.農学（pertanian)、g.会計学（akaun)、h.商学（perniagaan)、i.経済学（ekonomi)、j.社会科学（sains social)、k. 法学（undang-undang)、l.文学（sastera)、m.教育学（pendidikan)、n.その他（自由記述）(lain)、o.分からない（tidak pasti）である。詳細は、巻末付録を参照された

い。

23　進学を希望するマリム・ナワールのマレー人女子 26 人中、10 人が「教育学」を希望した（全回答数 43、複数回答可）。

24　予備調査を通じて、高等教育アスピレーションは男女ともに高いが、その理由・動機は男女で異なるという仮説的結論に至った。具体的に、「男子は冒険的で活動的である」ため、社会的・経済的な成功物語を企図して中等学校修了後に就職する。それに対して、女子とりわけマレー人女子は、高等教育卒業後に何らかの職業的な成功を望むというよりは、教師に従順で机の前にじっと座って学ぶことが、より「女性らしい」姿と考えるために、就職ではなく高等教育に進むケースが多い。詳しくは、鴨川明子（2002）「マレーシアにおける後期中等教育卒業者の進路選択に関する研究 - 進路指導カウンセラーの面接調査から - 」早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊第 9 号 - 2、pp.95-105. を参照されたい。

25　たとえば、タッヤマレー人女子 A さん（2002 年 8 月 23 日）、マリム・ナワールマレー人女子 N さん（2002 年 9 月 3 日）、同校マレー人男子 H さん（2002 年 9 月 3 日）他の発言による。

26　中西は、教育社会学的見地から日本女性の進路選択に関して「トラッキング」理論を用いて、「性役割観に基づくトラッキング・メカニズムは、学業成績に基づくそれとは独立のものであり、学業成績上は選択可能な進路の選択を制約している」とした。つまり、「女子の進路選択の機会と範囲は学業成績と性役割観との二重のトラッキングを受けている」[中西　2000, p.141]と言える。中西の研究の詳細については、第 1 章を参照されたい。

27　同一エスニック集団の女子には、進路展望の差異が認められる一方、性役割観、リーダーシップ、性差別に関わる価値観については、あまり差異が認められなかった。このことから、エスニック集団内部に進路分化を引き起こす要因には、性役割観以外の要因が考えられる。